
悠久のラスタリア

メア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悠久のラストリア

【Nコード】

N5234Q

【作者名】

メア

【あらすじ】

神宮寺 乃亜は、生まれてすぐに両親が殺され、引き取られた先では虐待され学校でもイジメをうけていた。10歳のとき、授業中とてつもなく精巧な物しかできなかったために自分に模倣の力があることに気づいた。16歳の誕生日を迎えた夜、目をあけると炎が目前まで迫ってきていた。逃げ道もなく炎の熱を感じながら目を閉じる。訪れることない痛みを不思議に思い目をあけると傷付いた姿で女神が目の前にいた。女神の話を聞き女神の願いを聞くことになった。

設定資料編（前書き）

他にも後日追加する予定です。

設定資料編

設定資料編

魔法

基本属性…火／水／土／風／氷／雷

高位属性…闇／光

最上位属性…時／無

基本属性…火／水／土／風発現率100%

基本属性…氷／雷発現率…40%

上位属性…闇／光0.001%

最上異属性…時／無発現率…不明（数百、数千年に一人いればいいほう）

各属性の主にできること

火…攻撃

水…回復

土…防御

風…移動

氷／雷…色々

闇…闇を操ったり、重力制御

光…光を操ったり、支援関係

時…時間や空間など。唯一無に対抗可能。

無…有りとあらゆる物を無に返す。唯一時に対抗可能

基本設定

基本属性の中では、強弱はなく使い方と魔力によって変化する。

基本、上位の属性に勝てない。ただし、例外はある。

（10倍以上の魔力を使用しコントロールがとれていれば勝つことができる）

属性は使い次第で攻撃にも支援や防御もできる。

所持していない属性は魔具などに魔力をいれれば使用できる。

種族設定

人口比率…人間40%、魔族25%、神族25%、竜族10%
格種族の魔力値

一般人…人間約4千、魔族約1万、神族約1万。竜族約1千
軍人…人間約1万、魔族約10万、神族約10万。竜族約4千

人間

魔力や身体能力など多種族にくらべて平均的。

錬金術などで作成した魔具で戦力差をおぎなっている。

精霊使いも少数ながら存在している。

現支配者…複数

支配大陸…フォドラ 出身世界…人界

魔族

魔力が高く身体能力は高い。

魔力を力に変換できる。

多種多様な種族が存在している。

戦闘方法は力任せが多い。

現支配者…魔王后

支配大陸…バルドール 出身世界…魔界

神族

魔力が高く身体能力は高い。

魔力防御率が高い。

魔力コントロールが得意。

戦闘方法は支援魔法をかけて戦う。

現支配者…神王后

支配大陸…アルテミシア 出身世界…天界

竜族

全種族中身体能力が最高。

魔力はほぼ無し。

人口が一番少ない。

ケモノ耳をしている。

竜族は女性しか生まれない。

（夫は多種族になる。）

気麟（物理攻撃をほぼ無効化する）を持つ。一部竜化も可能。

魔力関係は全種族中最低。

子供ができる確立が一番高いのは人族（10%）、魔族と神族（0.001%）

（魔族と神族の間にできた子供は両種族の特徴を持つ）

見目麗しい女性が多いため奴隷として欲しがる者が多い。

現支配者…竜王の側近

支配大陸…オルデシア 出身世界…竜界

精霊

どこにでも存在する。

人型から魔物まで多種多様。

精霊使いに力を貸すことも在る。

力もピンからキリまで存在する。

現支配者…なし

支配大陸…なし 出身世界…ラスタリア

古代神

ほぼ神王や魔王、竜王クラス。

神話で語られる存在などの強力な存在。

暗躍したり、気まぐれにたすけたりする。

神族や魔族とわかれ自由気ままにすごしている。

世界設定

ラストリアでは、神王、魔王、竜王、古代神などを殺したりして力を奪うことが可能。

奪う方法はいろいろある。殺したり、神力が宿る血を大量に浴びたり、粘膜接触、融合など。しかし、まず勝てないうえに、神力が肉体に適応するのにとてつもない苦痛を受けるため倒せたとこで発狂する場合もある。発狂せずに神力に適応した時神殺しとして絶大な力を得る。発狂した存在は他の神や神殺しなど力を求める存在の餌でしかない。

魔物の中にも神力を持つものもいる。

勢力情勢

神族・魔族が優勢。人族、竜族が劣勢。

現在休戦中であり、中心部にあるフィレージア大陸が中立地帯になっている。

休戦理由は神王、魔王、竜王ともに死亡したため休戦を余儀なくされたが反対派は多数存在する。

フィレージア大陸が中心にあり、北東に魔族が支配するバルドール大陸、北西に親族が支配するアルテミシア大陸、南東に竜族が支配するオルデシア大陸、南西に人族が支配するフォドラ大陸がある。

ラストリア通貨

4種族協定により通貨は統一されている。

白銀貨…一千万円

金貨…十万円

銀貨…千円

銅貨…百円

登場人物紹介

名前…ノア

種族…神、人間

外見設定

年齢…12歳（16歳）

髪色…金色

髪型…膝のあたりまであるストレート

瞳…真紅

身長…152cm

魔法属性…全て

魔力値…計測不能

特殊能力…模倣

超絶美少女

女神の力と体を手に入れた異界からの少年。肉体は不安定であるため性別がころころいれかわる。

模倣はありとあらゆる物をコピーする力。他者の特殊能力を得ることも得きる。

権能の力とイメージを補うことによって黄金の林檎を作り上げるこ

とが可能である。

ありとあらゆる魔法と呪術を使用できる。

イメージ…ネ○魔の闇の福音

名前…サクラ

種族…人間、神

外見設定

年齢…10歳

髪色…銀色

髪型…ショートツインテイル

瞳…蒼穹

身長…140cm

魔法属性…氷、水、光

魔力値…2721万

特殊能力…マルチスペル

女神フレイヤと人間の間に生まれた美少女。

女神の血を引いているため強力な魔力を持つ。

ノアをお兄ちゃんと呼び一緒にいる。

得意の氷系統はSランクまで使用できる。

イメージ…ましろ○シン○オニーの妹

名前…ヨミ

種族…竜族、吸血鬼

外見設定

年齢…11歳

髪色…銀色

髪型…ショートカット

瞳…漆黑

身長…146cm

魔法属性…雷、闇、無

魔力値…5400

特殊能力…吸収能力

設定後日追加。

イメージ…D○Dの子猫

プロローグ（前書き）

処女作になりますので至らないところもあると思いますがよろしく
お願いします。

プロローグ

神宮寺 乃亜は、生まれてすぐに強盗に両親が殺され、引き取られた先では虐待され学校でもイジメをうけていた。

10歳のとき、授業中とてつもなく精巧な物しかできなかったために自分に模倣の力があることに気づいた。

16歳の誕生日を迎えた夜、養父たちは旅行にでかけ一人ですごしていた。明日のバイトのため睡眠を取る・・・その晩、目をあけると炎が目前まで迫ってきていた。逃げ道もなく炎の熱を感じながら目を閉じる。

『・・・生命保険に入らされたからいつかこうなると思ってたけどずいぶん早かったな。まあ、これで楽になれるか・・・』

訪れることない痛みを不思議に思い目をあけると目の前に傷付いた姿の女性がいた。

『ここは、いったい・・・貴方は？』

『私は、女神フレイヤ・・・ここは、世界の狭間です。死に掛けている貴方を一時的にここに呼び出しました。』

『なにを馬鹿なといいたいがこの不思議空間ならしかたないか。』

『なっとくしていただきありがとうございます。貴方にお願いがありません。』
『やだ』・・・お願いだから聞くだけ聞いてください。』

『分かった。』

(聞かなきゃ話すすまないからな・・・どうせ暇だし)

『私はもうすぐ死にます・・・「いきなりだね」私のお願いは異世界に転生し私の娘を守ってほしいのです。』

『・・・無理・・・神に勝てないような奴にただの人間が勝てるはずないだろ。チート能力でもくれるの？』

『チート？なに言ってるか分かりませんが力をさしあげます。お願いできませんか？「別にいいよ」どうかおねがい・・・え・・・いいのですか？』

『どうせ死ぬ命だったし・・・かまわないよ。』

『ありがとうございます。』

『で、どうするの？』

『封印された私の力を開放するために貴方と私の体を融合させます・・・「え」大丈夫です危険はありませんし、私の死は免れませんので私の力と神の肉体をもって転生していただきます。』

『半神半人ってこと？俺の精神が変わらないならいいけど』

『正確には違いますが似たようなものですし、精神の問題はありません。』

『わかった。』

『それでは、お願い・・・します限界がちかづいているので・・・・・・』

（大変なことになったが、異世界が少し楽しみだ・・・）

『それでは・・・儀式を始めます・・・』

光り輝く魔方陣が現れ二人の姿がまじりあっていく。

『うう・・・気持ち悪い・・・』

『すぐ・・・終わります・・・がま・・・んして・・・ください・・・・・・い』

『ぐ・・・ぐ！痛い・・・うおおおおっ！』

『・・・よろし・・・く・・・おね・・・がい・・・』

金色の光が溢れ、乃亜は消え逝く意識の中疑問におもったことがある。

（あれ、性別とか娘の名前きいてねええええ）

こうして、乃亜は神の肉体と力を手に入れ異世界ラストリアへと行くのであった。

プロローグ（後書き）

こんな感じでプロローグ終了・・・いろんな作品に影響うけてるけど気にしないでください。

ご都合主義にぐだぐだですがよろしくお願いします。

第1話「神の体と神の力」

目を開けるとそこにわ岩肌が見えた。

『ん、ここは・・・っ！・・・そうか、たしかフレイヤがいついた・・・ん？頭に変な感覚が・・・』

『気づき・・・ましたか？』

銀髪をショートツインテールにした可愛い女の子の顔が見えた。どうやら、膝枕をされているみたいだ。

『おまえが、フレイヤの娘か？』

『はい、そうです・・・あなたが・・・私を守ってくれる人・・・ですか？』

『そういう約束だな・・・よつと、オレでいいのかどうかかわらないがいいよ守ってあげる』

『ありがとうございます。』

『君みたいな可愛い子じゃなければ放置する気だったがな・・・』
そう言うとな女の子は顔を真っ赤にした。

『え、そんなこと・・・ないです・・・／／／／／』

（女神の娘って聞いてたから予想してたけどここまでとはね・・・）

『オレは乃亜っていう・・・』

『・・・えつと・・・ノアさべすね・・・私は・・・サクラ・・・よろしく・・・おねえちゃん？』

『おい、まってオレは男なんだが・・・まさか・・・』

すごく嫌な予感がし自分の体を調べてみる。膝の辺りまである長い金髪に黒いローブの姿だった。

体の隅々まで調べた。

『お・・・おい・・・女になってる・・・どうなってやがる！』
さくらに聞いてみる。

『えつと・・・お母様の体に影響されてるみたいです・・・』「直

す方法は無いのか!」たぶん・・・できると思います・・・』手をかざし呪文を唱えるとサクラから光が溢れ魔法陣が展開されている。

『これで、どうですか?』乃亜の体の中に魔方陣が消えていく・・・『おゝもどつてる・・・って、慎重もだいぶ低いな・・・12歳くらいか?』

『それは、どうしようもありません・・・すみません・・・』うな垂れるサクラにノアは『気にするな別に問題ないしな』

『あ・・・あと、体はまだ完成していません、しばらくならさないといけないとお母様がいつてました。』

『そうなのか・・・』

『はい・・・しばらくすると普通に魔法も聞きにくくなります』『どうということ?』

『粘膜摂取以外ほとんどの魔法や呪術などきかなくなります』

『いろいろと便利なような、不便だね。まあいいやこの世界のこと教えてね』

『はい、魔法とこの世界について説明しますね。』

『この世界はラストリアといい魔族と神族、竜族、人族、など世界の中心に作られた世界ですラストリアでは、この世界の覇権を争い戦争をしていました。現在は休戦状態にありますがとても危うい状態です。基本的に大陸によって支配地域がわかれています。大陸は全部で五つの大陸があります』

『ここは?』

『人族が支配権しているフォドラ大陸です・・・逃げてる間にこんなところに・・・』

『フォドラ大陸ね・・・魔物とかいるの?あと、できたら魔法についても説明してほしい・・・』

『はい、わかりました・・・この世界には火、水、風、土、雷、氷、闇、光、時、無の10種類の属性が存在します。上位属性が光と闇で、最上位属性は時と無です。この時と無は伝説クラスの存在です。』

基本的に基本属性は高位属性に負けます……」

『じゃあ、最上位が一番強いんだ』

『そうなります……あと……精霊術や召喚魔法も存在しますが、どちらも契約が必要ですので……今は使えないです……』

『じゃあ、魔法の使い方教えてくれる？』

『はいっ！あと神の権能についても教えますねお兄ちゃん』

『お兄ちゃん？』

『だめ……ですか？／／／／／／／／／／顔を赤らめながら尋ねてくる。』

『別にいいよ……／／／／／／／／／／「ありがとう、お兄ちゃん」とりあえず権能について教えてくれる？』

『権能ってというのは神が持つ特別な力です……とっても強力です。お母様の権能で魔法と呪術はすべて使えると思います。作り出すことすら可能だと思います。生み出すことや戦いの神としての力や死についての力もありますが……使えるか分かりません……魔法や呪術は問題ないでしょうが……』

『しかし、すべての魔法や呪術がチートだな……たしか、黄金も生み出せるんだよね……よし、試すか……ここはやはり黄金の林檎だな……「無理だと思いますよ？」あっできた』ノアの手には黄金の林檎が握られている。

『何でできるんですか！？』

『あゝそういや、オレ……いや、この姿なら私でいいか……私には特殊能力があるんだ……模倣の力があるからそれと黄金を作る権能によってできたみたいだね。』

『……便利な力ですね』

『まあね、とりあえず食べるか……お、以外にいけるよ、ほら、サクラも食べて』新たに黄金の林檎を作り出しサクラに渡す。

『ありがとうございます……（はむはむ）おいしいです……』

『よかった。じゃあ、魔法と魔術を教えてね』

『分かりました。』

こうしてノアとサクラは出会い、ノアは女神フレイヤ力を手に入れた。

12歳と10歳の少女（？）二人は魔物で魔術や呪術を試しつつ人
族の街へと向かうのだった・・・

こうしてノアのラストリアでの冒険が始まった。

第1話「神の体と神の力」(後書き)

1話できた~~~~設定資料第一弾ですよ

設定資料

名前…ノア

外見設定

年齢…12歳(16歳)

髪色…金色

髪型…膝のあたりまでであるストレート

瞳…真紅

身長…152cm

魔法属性…全て

超絶美少女

女神の力と体を手に入れた異界からの少年。肉体は不安定であるため性別がころころいれかわる。

特殊能力【模倣】を持つ。模倣はありとあらゆる物をコピーする力。権能の力とイメージを補うことによって黄金の林檎を作り上げるこ
とが可能である。

ありとあらゆる魔法と呪術を使用できる。

名前…サクラ

外見設定

年齢…10歳

髪色…銀色

髪型…ショートツインテイル

瞳…蒼穹

身長…140cm

魔法属性…氷、水、光

女神フレイヤと人間の間に生まれた美少女。

女神の血を引いているため強力な魔力を持つ。
(魔力値…2721万)

ノアをお兄ちゃんと呼び一緒にいる。

得意の水系統はSランクまで使用できる。

一応メイン二人を書いてみました。

第2話「ゲルニオン溪谷」

サクラと共に洞窟を出るとそこは溪谷だった。

溪谷には魔物の骨がごろがっている

『ここは、どこかなサクラ？』

『ここは、ゲルニア溪谷です。Bランククラスの魔物がたくさんいるので危険エリアに指定されています。ここをぬけるとオルニオンの街につきます』

『Bランクというどんな魔物がいるの？』

『えっと、ワイバーンやマンティコア、バジリスクなどです……。あと……。SSランクのファブニールもいます』

『私たちなら楽勝かな？』

『です』

『殺風景なところで面白みもないしとっとオルニオンの街にいかか……。お金も無いから道すがら魔物を狩っていいこうか』

『はい、分かりました』

10分程殺風景な光景をみながら歩いているとサクラが警告を発する。

『お兄ちゃん、索敵魔法に魔物の気配がかりました……。』

『何体？』

『ちょっとまってください……。 (前方を指差しながら) ワイバーン3体マンティコア4体です』

『おーワイバーン楽しみ♪』わくわくしながら前方を見る。

前方からマンティコアとワイバーンがこちらにむかって飛んでくる。

『よし、サクラはみて魔法ためしてみる』

『はい、飛行モンスターが多いので気をつけてくださいね。』

『うん、わかったよ……。』

『えっと・・・魔力を収束・・・これくらいでいいや・・・荒れ狂え天より響く雷鳴！サンダーストーム！！！！』

【ドゴオオオオン！！！！！！！！！！】

雷鳴が鳴り響きワイバーンにマンティコアに数々の落雷が落ちる。

『ギシヤアアアアア！！！！』

『おゝすごいすごい、ワイバーンは死んだな』

『マンティコアは土属性だからあんまりきかなかったみたいですね』

『ダメージは大分入ってるみたいだね・・・』

サンダーストームを耐えて襲ってくるマンティコア・・・

『きゃっ』襲ってきたマンティコアの攻撃を避けるサクラ

『さてどうするか・・・』

『私にまかせて・・・』

『わかった、なら蹴って見る！』襲い掛かってくるマンティコアに飛び上がり

『食らえ旋幻舞！！』【ドゴン！！！！】マンティコア1体の首が吹き飛ぶ。

『大気に満ちる空気よ、凍れ、氷の刃となりて、切り刻め！！アイスランサー！！』

数多の氷の槍が残りのマンティコアに殺到し串刺しにする。

そして、全ての魔物が息絶えた。

『すごいな、魔力まとして蹴っただけ首ふっとぶんだ・・・サクラの魔法もすごいけど・・・』

『そうですね・・・お母様の体の力もありますから・・・素材広いましょう』

『そうだね♪あ、しまった・・・返り血あびちゃった・・・ま、いいか・・・』

『すぐ街につくよお兄ちゃん。』

『あそこ抜けたらすぐじゃないかな？』

『あの洞窟ですか？何か変な気配がしますが・・・』

『気にしない♪いつてみようゝ早く着替えたいし♪』

『お兄ちゃんがそういうならかまいませんが・・・』

近道と思い洞窟をすすんでいく二人。

洞窟の奥へ進むと巨大なドラゴンが居座っている。

『うわぁ！ドラゴンだ！！！！おきい♪』

『お兄ちゃんこれ・・・Sランクのファブニールだよ・・・逃げようよ』

『大丈夫だって・・・それに気づかれた見たいだし・・・』

『我が宝を狙い進入してきたか愚かな小さき者よ！！！！』

『『いや、宝とかしらないし／です』』

『万死に値する！死をもって償うがいい！！！！！！！！』

『聞く耳もってないし／しかたない、サクラ時間稼ぎお願い一撃で仕留めるからね』

『わかりました』

『たかが二人でなにができる。ぶち殺してやるわ！！！！』猛毒のブレスを吐きつけてくる。

『っ！！詠唱省略！アイスウォール！』一瞬で空気中の水分が凝固し氷の壁が現れる・・・しかし・・・ブレスが触れた場所は即座に溶け出してゆく。

『大気に満ちる空気よ、凍て尽くせ、永久に光なき氷に閉ざされん！アイシクルプリズン！』ファブニールを氷の中に閉じ込めるが・・・

・・・だんだんとヒビがはいっていく！

『黄昏よりも暗き存在、血の流れより紅き存在、時の流れに埋もれし偉大なる汝の名において、我今ここに闇に誓わん』

ファブニールを閉じ込めていた氷が割れファブニールが解き放たれる。

『よくもやってくれたな！人間ごときが！』

『時間稼ぎはできました』

『時間稼ぎしたことで・・・まて！それは！！！！馬鹿な！その

最後血を吸わせないととまらない魔剣だよ』

『大丈夫なの？』

『平気だよ……結果オーライだけどこの開けた道から街に行こうよ』

『はい♪お金や素材が沢山手に入りましたからオルニオンに行きましよう。あの、手をつないでいいですか？』顔をあきらめつつ聞いてくる。

『いいよ、行こうか』

こうして、ファブニールを倒し魔剣ファブニールとニールベルグの指輪を手に入れて交易都市オルニオンの街に向かうのだった。

第2話「ゲルニオン溪谷」(後書き)

竜破斬をつかっちゃいました♪

つぎはいよいよギルドや初街になります！

第3話「交易都市オルニオン」お風呂のできごと」

洞窟から出た二人は街道を4時間程歩き交易都市オルニオンへと入る。

交易都市オルニオンはフォドラ大陸南部に位置する街で防壁と騎士団やギルドの冒険者により魔物の脅威から守られている。交易都市オルニオンにはありとあらゆる品が集まってくる。剣や魔具などや闇市では盗品、奴隷の販売も行われている。そのため、護衛の仕事や娯楽施設も充実したオルニオンには大きなギルドがある。

説明を聞いたノアはサクラ手をしっかりと握る。

『じゃあ、離れないようにしないとね』

『はっはい／＼／＼／』

顔赤らめしつかりと握り返すサクラ達にいろんな視線が降り注ぐ。

『な．．．なんだろ？敵？』

『わ．．．わかりません』

二人は気づいていないが美の女神の血を引く二人は可愛くも美しい神秘的なオーラをだしているため見取れていたりする人が多い。中には襲い掛かってくる奴もいるが．．．．．

『うざい、消えろ』

『ギャアアアア』

ノアの身体能力にもものいわした攻撃で骨を折られたり、吹き飛ばされたりしていた。

『さっきからいったい何なんだ、まあいいや宿決めて早く風呂入りたい』

『そうですね、日も傾いてきたし着替えも用意しなきゃ』

二人は宿に向かっていった。

????? Side

どこかにある一室で美しい女性と男性が話しあっている。

『フレイヤが死んだか』

『そうね、後は娘の方かしら?』

『娘の方は放置でよかろう。たかが半神の小娘一人でなにができる』

『ま、そのうち野垂れ死ぬか・・・そういえば、ファブニールが消されたみたいね』

『あれが死んだとこれで問題無かろう』

『だいいいんだけどね』

Side End

風呂付きにしたため高級宿にした二人。

『お兄ちゃん一緒に入ろ／＼／／／』

『え、さすがにそれは・・・』

渋るノアに対してサクラは『大丈夫。お兄ちゃんの体は女の子にな
ってるんだし、髪の手入れとかちゃんとできないよね?』畳みかけ

てくるサクラに抗い切れず『まあ、いいかたしかに女の子の体だしな』

『やった♪一度やってみたかったの』

こうして風呂に二人切りで入ることになった。

風呂に移動した二人。

『しかし、ファンタジーなのにシャワーもあるんだね』

『はい、魔動機っていいですよ♪次は前洗いますね♪』

『えっ前は自分でできるからあ!』

『ダメです♪』

『いや、見えてるし』

『気にしません』

『やっ・・・っあ・・・やめ』

(サクラに体の隅々まで洗われた・・・ふふふ、これはやり返さなくちやいけないわね)

『じゃあ、私も洗いますね』

『ふふふ、サクラの身体は私が洗ってあげる』

『えっ、いいですよやり方わからないです「もう覚えた」よね?・・・

・じぶんであらえ「ダメ」や・・・やめえ・・・そちが・・・

きやっ・・・やめて・・・「やだ、気持ちいいし」・・・うう・・・

』

10分後、顔を真っ赤にしぐったりしたサクラがいた。

『しまったやり過ぎたかな』

『はあはあ、ひどいです・・・』

顔を赤らめ上目遣いで非難してくるサクラ

『まあ、後悔はしていない(きっぱり)』

『は・・・早く上がる・・・お兄ちゃん』

『了解』

ノアは脱衣所に行き服を着替えようとして。手が止まった。

『ねえ、たしか着替えは宿の人に用意してくれたんだよね?』

『そうですよ?かわいいドレスじゃないですか』

『待って、今問題なのは私の分までフリルたっぷりなドレスだったこと!』

『黒のゴシックドレスですね、とても似合いますよ』
にっこりと満面の笑顔のサクラに嫌な汗を感じるノア

『似合うとかじゃなくて、私男だからね!』

『でも身体は女の子ですよ「いや、そうだけど、でも」それしか着る服ありませんよ? ローブはボロボロだからすててもらいましたし』

『ぐっ、しかし』

『じゃ着替えましょうね♪』

(絶対さっきのこと根に持ってる!)

『ちょ待って!』「待ちません。さっき待ってくれなかったから待ちません♪」悪かっただから……』

『だゝめ♪』

無理矢理着替えさせられるノア。嬉しそうに着せ替えるサクラだった。

サクラSide

脱衣所

(一緒にお風呂入っちゃった……恥ずかしい／＼／＼)
『うゝやめっ』

(まだ服を着るのを嫌がるお兄ちゃん。でも、さっきのはすごく恥ずかしかったんだからこれくらいいいよね。すごく似合うんだし。) 10分後、着がえさせたノアを見るサクラ

『うゝ』

(うわお、すごく似合う綺麗……)

ノアのゴスロリ姿に見取れるサクラ。

『サクラ？大丈夫？』

ちよっと目が潤んだ状態で上目遣いで覗かれあせるサクラ。

『だって大丈夫だよ』

『そっかならないけど。ふう、もういいやたしかにサクラの言うとおり似合ってるし……』

(ほっ、怒ってなくてよかったよ)

『サクラもとってもよく似合ってるよ。その白いゴシックドレス』

『／／／あっあり……がとう……』

(嬉しいな、お兄ちゃんに褒められちゃった／／／)

『お兄ちゃん、これえっ……これからどうしますか？』

(かんじやった／／／)

『カジノにいつてみたい。お金いろいろ必要だしね(にやり)』

『???カジノでお金稼ぎなんて難しいですけどわかりました。宿の人に教えてもらいますね』

『お願い』

(カジノかゝどうなるだろ……)

二人はカジノへと向かうのだった。

サクラSideEndサクラSide

脱衣所

（一緒にお風呂入っちゃった・・・恥ずかしい／＼／＼）

『うゝやめっ』

（まだ服を着るのを嫌がるお兄ちゃん。でも、さっきのはすごく恥ずかしかったんだからこれくらいいいよね。すごく似合うんだし。）
10分後、着がえさせたノアを見るサクラ

『うゝ』

（うわお、すごく似合う綺麗・・・）

ノアのがスロリ姿に見取れるサクラ。

『サクラ？大丈夫？』

ちよっと目が潤んだ状態で上目遣いで覗かれあせるサクラ。

『だって大丈夫だよ』

『そっかならないけど。ふう、もういいやたしかにサクラの言うとおり似合ってるし・・・』

（ほっ、怒ってなくてよかったよ）

『サクラもとってもよく似合ってるよ。その白いゴシックドレス』

『／＼／＼あっあり・・・がとう・・・』

（嬉しいな、お兄ちゃんに褒められちゃった／＼／＼）

『お兄ちゃん、これえっ・・・これからどうしますか？』

（かんじやった／＼／＼）

『カジノにいつてみたい。お金いろいろ必要だしね（にやり）』

『???？カジノでお金稼ぎなんて難しいですけどわかりました。宿の人に教えてもらいますね』

『お願い』

（カジノかゝどうなるだろ・・・）

二人はカジノへと向かうのだった。

第3話「交易都市オルニオン〜お風呂のできごと〜」(後書き)

次回予告!

交易都市オルニオン〜カジノ編〜

果してノアの秘策とはなんでしょいか

第4話「交易都市オルニオン」カジノ編」(前書き)

ミスで何度も消してしまった。(T|T)orz
そして長くなりすぎたよ。はい調子乗りました。

第4話「交易都市オルニオン」カジノ編」

（さて、やってまいりましたオルニオンのカジノです。宿の人に聞いてきたけどおつきいね。国会議事堂をまるまるカジノにした感じ・・・しかも、一応国営らしいが裏の人達も多数いるとか・・・まあ、危険は無いらしいからいいけどね。カジノでオークションもやってるらしいからお金を稼げたら参加しよう。サクラになにかあげてもいいし。っと順番かむっなんだかこつちを舐めるように見てくるな・・・剣もってるから警戒されてるのか？）

『つこほん、ようこそいらっしやいましたお嬢様方。とうカジノは会員制となっております。会員証をお持ちでない方は手続きが必要です。』

（聞いていたとおりだな。これほど大きければしかたないか）

『わかりました。二人分お願いしますね。』

『畏まりました。会員登録手数料としてお一人様につき金貨10枚になります。お二人様ですので金貨20枚となります』

（えっと・・・・・そういえばお金どうなってるか聞いてないな・・・・・）

『お兄ちゃん・・・・金貨4枚しかないよ・・・・どうしよ・・・・』

（あら、足りないのか仕方ない非常手段だやりたくないが・・・なに？ いったん帰ってごめんこうむる。）

『お兄さん負けてくれませんか？金貨二枚くらいに……目
を潤ませ上目遣いをお願いするノア

『っ……わか……（頭を振り）誠に申し訳ございませんがま
けることはできません』

『どうしてもダメですか？』

『ダメです』

（ツチ、しぶとい。使いたくなかったが）ポケットの中に手を入れ
黄金を作りだす権能を使う。

『では、この黄金で支払いでもよいですか？』

『少々お待ちください……』

（どうやら本物か調べる魔法を使ってるみたいだな。ついでだから
覚えるか）

『お待たせいたしました。こちらからお支払いということですが・
・不足分は金貨でお受け取りなさいますか？それともメダルでお渡
ししましょうか？』

『では、メダルでお願いします』

『わかりました。こちらが会員証となります。会員証の中にメダル
を保存することもできますので紛失なさらないようお願いします。
注意事項は会員証を見てください。それでは、ごゆっくりお楽しみ
ください』

『ありがとう。サクラいこ』

『はい、しかし凄く高いですね。お金について説明してなかったですね』

説明中

（金貨一枚十万円、銀貨一枚千円、銅貨一枚百円で白銀貨が一千万円かな。金貨二十枚だと二百万だから一人百万たかいな）

『凄く高いね。しかしこの会員証のカードは便利だな。メダルの保管や受け渡しもできるし、このカードから直接お金を使いメダルを買えるのか』

『ほんと便利だね。私カジノ初めてだけどどうしよ……』

『スロットをやってるといいよ楽だから』

『わかりました。がんばります』

（お、綺麗なお姉さんが受付してる……っサクラから変な氣がくるけど氣のせい氣のせい）

『ようこそお越しいただきありがとうございます。こちらでは、武器のお預かりと魔力封印の指輪をお渡ししています。こちらを付けていただかれない場合ゲームに参加できない事をご了承ください』

（イカサマ防止か別に問題無いな。神力は消せないみたいだしな。中に入るといろいろあるな。ルールは同じか……）

『じゃあ私はスロットのどこに行きますね。お兄ちゃんもがんばってね』

『わかったよ。何かあれば念話ちょうだい』

『はい、行ってきます！』

（さてサクラはいったかいろいろまわろうかな。効率良く稼ぐための準備もあるし一通り回るか・・・）

30分後

『うわーん全部なくなっちゃった・・・』

『ぐふふふ、お嬢ちゃんおじさんと勝負しようか』

『でも、ノアもうメダルないよ？』

『ぐふふふ、ノアちゃんが負けたらおじさんと一晩一緒にいるだけでいいからね、ノアちゃんが勝てばメダル沢山はいるよ？』

（くすくす、掛かったね）

『わかったよ、おじちゃんでも・・・賭けるのは白銀のメダルね？』

『いいじゃろ、どれにするかね』

『ノアは、あれやってみたいな』

『ブラック・ジャックかわいいじゃろ』

ブラック・ジャック勝負

『それでは、始めます』

(さて、どうなるかな)

『ノアちゃん、おじさんは19だよ。ノアちゃんわ?』

『18だよ!勝てると思ったのに』頬を膨らませるノア

『おじさんの勝ちだね。どうする?もう一度するかい?もちろん掛金は増えるけどね』

『うーん、やる!今度こそ勝ちやうんだから!』

おじさんSide

(ぐふふふ、馬鹿な小娘だ勝てるはず無いのにな。このディーラーには金を掴ませているんだからな。もっと釣り上げて僕ちゃんの物にしてやるこの可憐な天使ちゃんお!!)

『さあ、二度目の掛金はおじさんは白銀のメダル10枚、ノアちゃんは一週間ね』

『うん！えっと6と7だから12でしょだから9だせばいいんだ・
・・・』

（まる聞こえなのに間違ってるしな、ぎやはは）

『よし、おじさんはこのままでいいよ』

『カードちょうだい！9よ来て下さい！』配られたカードは9

『やったこれで21だ！』

『残念だけどそれじゃあ22でバーストだよノアちゃん』

『そんなくうう、もう一回！』

（馬鹿だな都合いいがな。ああ、早くこの子を堪能したいな）

おじさんSideEnd

『ぐふふふ、いいよただし次は一年だよ。もちろんおじさんは白銀のメダル100枚だ』

（さて、ここまでは計画通りディーラーもぐるか二回の間みてる感

じ腕はいいのにな……さあ、狩りの始まりだ）深紅の瞳が怪しい光沢を放ち始める

『じゃあ始めようか楽しいゲームを……』

『うん？ そうだね始めよう』（飼って可愛がってやる）

『……なんだこのプレッシャーは……』ディーラーは冷や汗を欠いていた。

野次馬達『かわいそうにあの女の子とってもかわいいのに、あんながまがえるなんかに……』『俺も御相伴に預らせてもらうかね』などとディーラー以外プレッシャーに気づいていなかた。らた。

『おじさんは20だよ。おじさんの勝ちだねノアちゃん。たっぷり遊んであげるよ』

『おじさん勝った気でいるのは早いよ？ 一枚くださいな』裏向きでカードをテーブルに置く

『はっはい』手の震えを押さえながらカードをくばるディーラー

そして、配られたカードはQ。ノアによって開けられた一枚目のカードはK。野次馬は黙り込み誰かの唾を飲む音すらきこえる静寂にみちた。ノアにより開かれた最後のカードそれわ……

『ブラック・ジャック』開かれた最後のカードはAだった。会場からは拍手喝采が巻き起こる。

『馬鹿な信じられん！！！！』

『では白銀のメダル100枚頂いていきます』毅然たる態度で立ち去るノアに少し前にあった子供っぽさは無くなっていた。

『まって!』

『待ちません。次の掛金は白銀のメダル1000枚です。払えるのですか?』小国なら買える値段である。

『ぐっミーティアライトでどうだ!!』

『ミーティアライトってなんですか?』

『お兄ちゃん。ミーティアライトっていうのはね・・・とてつもなく希少でとっても凄い力を持つ鉱石なの』耳元により囁く。

『わかったよ。あと、この格好のときはお姉ちゃんにして。男でこんな姿してるなんて思われたくない』

『わかりました』

この二人の姿に会場は別の意味で静かになった。『お持ち帰りしたい』などの心の声が聞こえようだ。

『でわ、それと白銀のメダル400枚でかまいませんよ?』

『ふざけるな!!』『ふざけてませんまじめです』ぐっ、いいだろうただしそっちの子も景品だ!!』『サクラを指差すガマガエル』

『いいですよ「えっえっ?」「後悔させてやる!!!」サクラ気に無くてもいいですよ「無視するな!!!」』どうせ私が勝ちます「は

い、お姉ちゃんが言うなら気にしません」では始めましょう』

『カードをよこせ!!!」「はっはい」ぐふふブラック・ジャックだ.....』

『そう...ですか』しょんぼりするノアに勝利したと思ったガマガエルは多いに喜んだ。

『私はAとKですね』ノアとサクラを除く全ての人が啞然とし、ノアの勝利を喜んだ。

ガマガエルはノアがイカサマをしたと訴えるがノアからは何もでず訴えは誰も信じなかった。

『サクラはどうだった？私は白銀のメダル500枚かな』

(50億か随分と稼いだ。鴨がよかったか)

『私は.....』

サクラSide

お兄ちゃんと別れた私は教えられたスロットマシンのどこに来ていました。

『えっと、ここにカードを入れたら自動で支払ってくれるんだ。白銀一枚はのこしていこ』

私はスロットゲームをやりだした。あのような結果になるとは知らずに……

30分後

私は後悔していた

ついついスロットゲームにはまるあまりやり込んでしまいました。そのために残り資金白銀のメダル一枚しかなかったため後悔しつつ散策に切り替えました。

そうしているうちに、私の目に止まったのは大きなスロットマシン……どうやらこれは白銀のメダルを使うようです。普通はこんなのしませんよね。白銀貨と同じ価値あるので金貨100枚と同じということです。でも、このままだとお兄ちゃんに嫌われちゃうと思った私はこのスロットマシンに賭けることにしました。

『よし、いって』

スロットが始まり一個目のボタンを押した時感じました。

『このスロットマシーンやりやすい。速度があってるのかな私の思うようにできる♪』

私はまずなんでもいいので絵柄を揃えることにしました。なぜならメダルが一枚しかないからです。でた、メダルを使い新たにゲームを始めました。

『ここです』

もちろん揃えたのは777揃った瞬間鐘の音が響き白銀のメダルが一気に200枚もの数を手に入れました。私は即座に再度挑戦します。またもや777をだします。

『あ……あれ？とまっちゃった』

しばらく様子を見てみると店員さんがやってきました。

『すいません、お客様不足分のメダルはカウンターでお受け取りください。機械の故障のようです。誠に申し訳ございません。』驚いていた店員の言葉に従いカウンターで残りのメダルを受け取りました。

『そろそろ、お兄ちゃんのところにいこう』

サクラSideEnd

『というわけで400枚です。えへへ』

『凄いね、ちなみに無くなっても怒らないからね？」「・・・はい・・・」にしても900枚か凄い数だね。これならオークション参加できるね』

『はい、楽しみです』

『そうときまればもうちよと増やすか・・・いこサクラ』

『はい♪』

二人は仲良く手をつなぎオークションが始まるまでの時間メダルを稼ぎ続けた。カジノ経営者と出資者はあまりの損失に身投げしる者もいたそうなの。

第4話「交易都市オルニオン」カジノ編」(後書き)

イカサマにはイカサマを!! 勝てなさそうなら手段を選ばない!!
!! (おい

とま本作で使ったイカサマはたぶんわかると思いますか世界支配の
力ですね。

では、またみてやってくださいな。

お休みですの

第5話「交易都市オルニオン」就寝前の一時」(前書き)

オークションと思ったけどこのシーンが書きたかったから変更しました。すいません。

第5話「交易都市オルニオン」就寝前の一時」

さて、オークションに参加しようと思って店員に聞いてみたら問題が発生していた。魔物のせいで積み荷がいつ来るかわからないらしい。そのためオークションは延期になるらしい。しかたないから、サクラと共に宿に戻った。

今日一番の問題は部屋に戻ってからだった。ろくに部屋を確認せず風呂に入りカジノへと向かったため部屋の中を調べていなかったのだ。

私の目の前にはベッドが一つ・・・そう、た天蓋のついた豪華なベッドが・・・

『サクラ・・・ベッドが一つしかないんだけど？』

『・・・えっと・・・一緒に寝てくれませんか？』恥ずかしげに上目遣いできいてくる。

『ま・・・まあ、いいか女の子の体のままだし』

『ありがとうお兄ちゃん♪』

サクラみたいな可愛い美少女にこんな頼まれ方をしたら断れるはず無いじゃないか。ん？何かきぬ擦れの音が聞こえましたよ？気のせいですよ？振り返るとそこには小さな女神様の生まれたままの姿でっっていた。

『あの・・・サクラ・・・なぜ裸なのかな？』

『？寝る時は裸になって寝るのです。服に皺ができるじゃないですか。野宿でも無いのですからお兄ちゃんも脱いで……』

サクラが手が服をどんどん脱がしていく。

『ちょっと、待って心の準備が……あう……』

うう、サクラに裸にされた。風呂みたいに湯煙が無いから直に見えちゃうし……まだ、慣れてないのに。

『じゃあ、寝ましょお兄ちゃん♪』そう言ってノアをベッドの中に連れていく。

なんか、これ貞操の危機って感じ？堪えられるかな……

『お休みなさい……すう……すう……』

『ちよ、もう寝てる……疲れてたのかな……にしても、柔らかくてすべすべで暖かいな。気持ちいい。危ない気もするが気にしないでいいやなるようになれだ。』

サクラの身体を抱きしめ返し、頭を撫でながらこれからの事を考えるノアだった。

サクラSide

お兄ちゃんの前で恥ずかしけど裸になり一緒にベッドへ入り抱き着いた。

『お休みなさい・・・すう・・・すう・・・』

すぐに寝たふりをする私にお兄ちゃんは驚いたようだけど寝たとおもったみたい。

『ちょ、もう寝てる・・・疲れたのかな・・・にしても、柔らかくてすべすべで暖かいな。気持ちいい。危ない気もするが気にしないでいいやなるようになれだ。』

抱きしめられ、身体を触るお兄ちゃんの手・・・とっても柔らかくすべすべ気持ちいいです・・・やっぱり私はお兄ちゃんが好きなのかな？お母様の身体だからこんな気持ちになるのかな？お母様と一緒に寝てるときはこんなにドキドキしなかつたのに・・・

『・・・んっ・・・あ・・・』

なんだか撫でられるたびにいい気分になってくる・・・暖かくてぽわぽわした感じ・・・久しぶりにゆっ・・・くり・・・寝れ・・・そ・・・う・・・

サクラSideEnd

第5話「交易都市オルニオン」就寝前の一時」(後書き)

初メール執筆です。

ちよとづつ書きやすいように試行錯誤してます。

第6話「交易都市オルニオン〜ギルド編〜」

『……ん・朝か……』

朝日が差し込み目を覚ました、いつもよりぐっすり寝れたな。サクラのおかげか……視線を下に向けると安らかに眠るサクラの顔を眺めていると。

『……おにい……ちや……ん……』

『満面の笑み浮かべて……起こせないじゃん』

しばらく、寝顔を眺めているとしよう。そうしているとノックの音が聞こえてきた。朝起こすように頼んでたからそれかな？

『どうぞ』

『失礼します。お客様ごちようしよ……っ』なんか鼻血をだしたけど大丈夫かな？

『失礼しました！ごゆっくりお楽しみください！』

慌て差っていったけどお楽しみください？なんだろう、考えているとサクラが起き出してきた。

『ふぁ〜お兄ちゃん、おはようです』

『おはよう、今日もサクラは可愛いね』

『っそ……そんなこと無いです。お兄ちゃんのほうが……』
『なに？』

『なんでもないです』お互い裸でなんて話してんだか……
まで、ドアの方から見るとベッドの上で裸の女の子が押し倒して行為に励んでいるように見えるジャナイデスカ……誤解とかなきゃ……
・めんどいな……『お兄ちゃん、着替えましょ。今日はギルドいって夜にカジノ行くんでしょ？』

『わかったよ・・・え、それきなきゃだめ?』

『ダメです♪お揃いでいいじゃないですか♪』

いつになったら男の身体で安定するのやら。白と黒のゴスロリを着たサクラと私は朝食を食べに食堂にいきました。

朝食をとりギルドに行きました。ギルドの中に入ると恐い顔したおじさん以外にも女性や子供もいたよ以外だね。その全てが私達に注目していますが、サクラの可愛いさに見とれてるのかな?見るだけならいいかな、それ以外は許さないけどね。なんかおじさんが絡んできたや、どうしょ。『よう、貴族のお嬢ちゃんたちがこんなところに何のようだ?』

どうやら私達を貴族と想ったみたい・・・こんな姿じゃしかたないか・・・

『ギルドに登録しにきただけです』

『お嬢ちゃんたちがかやめときな怪我するだけだぜ』

『ご心配ただかなくても大丈夫です』

『そうか、ならいいが綺麗な身体に傷が着かないようにせいぜい気をつけるんだな』

どうやら、本当に心配してくれてたみたいですね。

『やっやめてくださいっ』

『サクラどうしたの!!』

振り返ると酔っ払いがサクラの手を掴んで引き寄せようとしてやがる。うん、殺すか、いや生温いな・・・

『汝永遠の牢獄にて、腐食の苦痛を味逢わさん。腐食の幻影』

この呪術は永遠に体中が腐食していく幻影を見続けるようになる。解除はまず無理だしね・・・ふふふ、サクラに手を出すのが悪いんだからね。

『っぎゃあああああ』

走り去ったか・・・

『サクラ大丈夫? ごめんね気づかなくて・・・(しゅん)』

『大丈夫だよ。それよりさっきの人大丈夫かな酔ってただけだから・・・』

『サクラは優しいね。明日には消えるようにしとくよ』

『うん、あそこで登録するんだって』

確かに書いてあるね」

他の人があまりのことに付いていけない中二人はカウンターへと向かった。

『ギルド登録お願いします。二人ぶん』

『わわかりました。こちらに必要事項をお書きください』

『あ、文字書けないや。読むのと会話はできるけど』

『じゃあ私が書きますね』

『よろしくサクラ、勉強しようかな』

『はい、後で教えますね。はい、書き終わりました。』

『サクラ様にノア様ですね。登録いたしますので少々お待ち下さい。その間にギルドについてご説明いたします。』

『解りました』

『それでは、ご説明いたします。まず、ギルドに登録していただきますとこちらの腕輪を差上げます。この腕輪は魔動機技術が使われており、ボタンを押すと装着者のステータスが表示されます。この腕輪を装備して戦闘していくと腕輪に経験値が蓄積されギルドランクとレベルが上がります。ギルドランクがあがるとより高位の仕事や情報を手にすることができます。レベルがあがると腕輪の装備効果が上がります。具体的にいうと身体能力が上がったり魔力があがったりなどです。腕輪には魔力を貯めることにもできるのでどうぞご利用ください。始めはEランクより開始となります。ランクの中でも5段階に別れています。上のランクの仕事は1ランク上の2段階まで受けることが出来ますがオススメはしません。まず、失敗しますので、勿論失敗すると違約金を支払わなければいけません。これで説明を終了します。こちらが腕輪になります。腕輪に金貨4

0枚でアイテム四次元保管庫、アイテム自動収集装置を追加でき「
お願いします。二人ぶん」……白銀貨ですね。金貨20枚のお
返しです。』

そんな便利な物付けるに決まってるじゃん。普通は登録即座に拡張
はないみたい。お姉さん頬がひくついてるしね。

『どうぞ、二人分です。改良済みの方ですので再設定お願いします』

『『ありがとう』』

『ベ……べつに仕事ですから……』

顔赤らめてるねサクラの笑顔にやられたかな。（自分のことはわか
ってない）

『じゃあ、仕事見せてください。お姉さん』『はい、こちらです』

『うーん薬草採取と魔物の討伐に盗賊の討伐もうけようかな』

『えっダメですよ盗賊の討伐はまだ危険すぎます!』

『大丈夫ですよお姉さん。ね、サクラも平気だよね?』

『はい、問題ないと「へっお嬢ちゃん達には無理だぜ」大丈夫です』

『そっかあ、ならうけよ!』

『だから、やめとけ怪我するだけだ小娘二人になにができんだ?』

護衛でも雇うのか?』

『うるさい、関係ないでしょ?』

『この!なら、俺達が先に片付けてやる!いくぞ!!』

『いっちゃった』

『この場合報酬とかどうなるの?』

『倒した方に入りますね。共闘した場合相談してください』

『わかった。いこサクラ』

『はい』

カウンターで二人を見送ったお姉さんは……

『大丈夫かしら、あの二人が盗賊に捕まったら……あんなこ
とやこんなことに……先に行った人に期待しましょう』

こうして始めての仕事に向かうのだった。

第6話「交易都市オルニオン〜ギルド編〜」(後書き)

おかしいさんに目出すはずがギルドの説明だけでおわっちゃった。設定も載せておいたので見てやってください。

PV5000こえたよやったね。

サクラ「ありがとうございます。これからもよろしくです」

第7話「交易都市オルニオン」初めてのお仕事」（前書き）

また飛んじまいました（T―T）

一日一話できたらいいな

第7話「交易都市オルニオン」初めてのお仕事」

依頼を受けた三つの中からサクラと相談して薬草採取と魔物退治から終わらせようってことになった。理由は簡単で山賊退治してくれるなら面倒だからそれでいいやと思っちゃいました。お金余裕あるしね。魔物倒して金貨80枚は稼ぎたいね〜無理だろうけど。サクラの話しだとオルニオン付近の森にいるらしいからやってまいりました。くそうつとうしい視線がなくて気分いいから沢山切り殺しちゃえ♪剣の練習しなきゃね身体能力に頼り切るのは嫌だからな・・・技術はとても大事ですね。どんなゲームもプレイヤースキルで変わって来るし、リセット出来ない世界なんだから後悔したくないからね。

『サクラは薬草をお願い。私は魔物狩ってるから』

『分かりました。気をつけてね』

『うん、行ってきます』

さて、今回の依頼はホワイトウルフと取り巻きのウルフの討伐と。しばらく歩いて、目撃情報があるところについたよ・・・

『・・・さっそくお出ましか・・・』

緊張してかたな〜まあ、ワイバーンやマンティコアより弱いだろうからなんとかなるか。

「グルウウウ」

『さて、皆殺しにするか・・・いきます!!』

ダーインスレイヴを引き抜き目の前えに迫って来るウルフを一刀両断する。

『つわつとと・・・ふぎゅ』

なにこの切れ味・・・お陰でこけちゃったじゃないか!なんか背後に嫌な気配が・・・

『っ！あわわ』

後ろにウルフの爪が・・・転がって避けられたからいいけど・・・怖いな・・・むう、油断大敵か・・・しかし、この世界に来て初めて恐怖感じたや・・・多分喰らっても平気なんだろうけど試す気にならないね。

『ふう、ここから仕切り直したよ！』

単純に引き寄せ・・・体ごと回転させて叩き切る！

2と3体纏めて殺せた。爪めで防いだところをそのまま切断する。

『切れ味を考えて切ればどうにかなるかな・・・後、5体・・・』

5分後

『一体逃げたか・・・ホワイトウルフのどこまで連れていってもらうかな〜詠唱しながらいこ♪』

30分後

竜破斬によって巣ごと破壊しちゃいました。クレーターできちゃった。

『お兄ちゃん大丈夫でしたか？すごく大きな音が聞こえてきましたか・・・』

『平気だよ・・・巢事消しただけだからね。返り血もダイインスレイヴが全部吸ったし。サクラのほうは、薬草どうだった？』

『無事に採取できたよ』

『なら、次は山賊退治かあの人たちが倒していると楽だけだね』

『よほどのことがないかぎり大丈夫でしょう。いこ、お兄ちゃん』

『うん、道案内よろしくね』

2時間前

??? Side

私は今暗い檻の中に閉じ込められている・・・特別な首輪を付けられ、他にも刻印が刻まれた手枷と足枷によって自由が奪われている。

『・・・なんで・・・こんなことに・・・』

私はある村で生まれ育た。その村はある神を封印していた・・・神に贄を捧げること・・・母は、神の贄として捧げられ犯され私を宿した。その後、母は私を自分の命もかえりみず逃がしてくれた・・・祖父に引き取られた・・・この時、私は神を殺す覚悟を決め寝る間も惜しみ血の滲むような修行に励んだ・・・5歳のとき、旅人のおじいちゃんに三年間戦闘技術と連環光気功を教えてもらった。8歳になり神に挑んだけど殺されたが祖母が吸血鬼の真祖だったために真祖の力が覚醒して一命をとりとめた。真祖の力を使えるようになり、もう一度神に挑み二年間もの間死闘を繰り広げ敵を取ることができたが後遺症により記憶を失ったらしい。その後、祖父は死に引き取り手の親戚に奴隷商人に売られた・・・そして、現在にいたると。

『わたしに神を殺せるはずないのにね』

しばらくすると外が騒がしくなってきたけどどうしたんだろ

『山賊の奴ら魔物を使ってやがる!!』

『おい、私達も手伝ってやる』

『討伐依頼うけたギルドの連中か!助かる!』

『いくぞ野郎共!!!』

『っち邪魔な連中め纏めて殺してやる!我が呼び声に応えよ。太古

の契約の元汝を召喚す！いでよケルベロス！』

『つな、馬鹿なケルベロスだとAランク魔獣だぞ！』

『成程、これなら護衛に勝てるはずもないな』

『話しが違う俺は逃げるぞ！軍でもなきや勝てねえよ！』

『ギャハハハ、誰が逃がすかよてめえらはいつらの餌になるんだからな！いけヘルハウンド、ケルベロス！』

『これは仕方ない切り札切りますか・・・』

男の人がこっちにきてわたしの手を引っ張る。

『離して！』

『貴方の出番です敵を殲滅してください』

『無理だよわたしにできるはずない』

『無理なら死ぬだけです』

『いやっ』

抵抗むなしくケルベロスの前に引きずり出された。顔が三つある大きな犬の口が迫って来る。

『イヤァァァァァァ！！！！！』

??? Side End

2時間歩き山賊の出現ポイントへと向かってるとき悲鳴が聞こえた。

『お兄ちゃん』

『なにかあったみたいだね。急ごう。』

『はい!』

なにか嫌な予感がする。

森を抜けたさきに目にしたのは、数多の死体の中心に佇む銀の髪をした小学生くらいの猫耳少女だった。

『すごいな』

『お兄ちゃん、神の気配です。神か神殺しのようです』

『この気配がそうなんだ。わかった』

女の子の顔がこっちをみたけど・・・

『・・・神・・・殺す・・・』

『っ』

いきなり目の前にきた!ダーインスレイヴを引き抜きガードする。

『ぐっ』

ガードしても吹っ飛ばされた!やばい、もう目の前にいる早すぎだ
って!

『っ! Protection!』

『・・・殺す・・・』

うわ、一瞬でProtection割られた。

『お兄ちゃん!させない!Ice Wall!』

サクラのIce Wallのお陰でどうにか助かったか。

『ありがとうサクラ』

『お兄ちゃんすぐくるよ!』

『わかってる』

すでにIce Wallは溶けはじめていた。

『サクラ、この女の子についてわかる？』

『耳からして竜族の子だってくらいなら』

『竜族なら竜破斬でどうにかなるか、詠唱中お願い！』

『わかったよ、これならいけるかな？ 白銀の世界、光りを纏い輝く氷の結晶にて我が前に立ち塞がる敵を討て！ F u r o s u t o P r i s m ! 』

すごいな、光と氷の合成魔法か・・・これならダメージが・・・光と氷の吹雪が収まると体中から煙りをだしながら近づいてくる少女の姿がみえる。急速に傷が治ってる。

『うそ、ダメージが回復してる・・・あの回復の仕方と光のダメージの入り片・・・まさか、真祖？ 反則だよ・・・』

『任せて、我が前に立ち塞がる敵を討ち滅ぼせ！ 竜破斬！！』

『・・・DragonBurst・・・』

二つの強大な力がぶつかり合い視界を真っ白に染める。

『あはは、化け物だね。人のこと言えないけどね』

視界が戻ると大きなクレーターができていた。

『つく、これはまずいかな』

『そこまです！』

『ぐっ、ぎゃああああ、痛い痛い痛い・・・』

女の子は苦しみだし動かなくなった。

『大丈夫ですか？』

『なんとかね』

『誠に申し訳ありません。こちらの不手際で危ない目にあわせてしまいました』

『怪我してないから別にいいです。それよりあの子は？』

『はい、この子は奴隷ですが強力な力を持っている用でしたので最終手段として使用いたしました』

『そう、奴隷ってことは売ってるの？』

『はい、オルニオンのカジノで行われるオークションの品でございます』

『いくらくらい？』

『白銀貨100枚からスタートですのでおいくらになるかはわかりません』

『開催日は？』

『おそらく明日になるかと』

『ありがとう』

『いえいえ、こちらこそ申し訳ありませんでした』

『お嬢ちゃん達強かったんだな』

『貴方達はギルドにいた人ですね』

『悪かったな、こんなに強かったとは思わなくてな』

『お気になさらず』

『それはありがたい。俺はニッグ。こっちがユリカにヒロシだ』

『よろしくね』

『ユリカだ』

『ヒロシっす、どうぞよろしくっす』

『そう、よろしくされないけどね』

『お姉ちゃん・私はサクラです。こっちがお姉ちゃんのノアです』

『ああ、よろしくな』

『皆様、お一つ依頼を受けてくれませんか？』

『報酬しだい』

『だな』

『報酬は白銀貨をお二人のPTに5枚づつ。依頼内容は山賊のアジトにあるだろ奪われた品物の回収です』

『高いな』

『それぐらいの価値はございますし、メンツの問題ですから』

『まあ、いいよ欲しいのあったらもうけどね』

『それは困りますね』

『だって山賊をこっちで殺せば丸々もらえるしね』

『分かりました。戻ってきた品物によって追加分支払います』

『了解』

『では、お願いします。私はグレイと申します。カジノの受け付けにてお呼びください』

『わかった。いくぞ』

『ういっす』

『ああ』

『お兄ちゃん・・・あんな事聞いてどうしたの?』

『あの子、欲しくなってね・・・』

『そうなんだ・・・大丈夫かな?』

『大丈夫、必ず手に入れる・・・何としてもね・・・ふふふ』

『（私の心配はそっじゃないんだけど・・・）』

『おい、何してるいくぞ!』

『ほら、いこサクラ』

『うん』

この後、山賊のアジトを破壊し財宝を持って帰った。報酬は白銀貨8枚金貨10枚だった。

現在資金…白銀貨487枚金貨30枚

第7話「交易都市オルニオン」初めてのお仕事」(後書き)

神殺しVS神殺しどっちも覚醒もなにもしてないけどね。次回はオ
ークションだよ。戦闘はないと思うです。

第8話「交易都市オルニオン」オークション」

山賊のアジトから手に入れた財宝を渡したあと、グレイさんに質問してみた。『私達でもオークションに出品することは出来ますか？』

『できますよ。今から手続きをすれば一週間ぐらい先になりますが……』

『そうですか……』

資金稼ぎのために黄金でつくった剣売ってたんだが……

『何をお売りたいので？』

『黄金でできた剣を作ろうとしてね』

『えっすぐ出来るのですか？かなり鍊成むずかしはありますが……』

『しまった。ごまかすか』

『造りかけの物があるんです、それで……』

『そうですか、黄金の剣ともなれば目玉商品になるので出来が良ければ次のオークションにだせるよう取り計らいますが……』

『あの女の子のまえにしてね』

『分かりました。現物見てからですがね』

『分かりました』

一旦戻って造るかな

20分後、サクラと合流し宿にむかった。

さて、黄金の剣を造るかな……見た目は豪勢にして……カリバーンみたいなのは出来ないしね。刻印の入れ方がわかんないし、切れ味は良く黄金の特製を活かし壊れない剣にしよう。

『お兄ちゃん、何してるのですか？』

『んとね、黄金の剣造ってるんだ、名前決めてないけどね』

『じゃあ、魔法防御もあげましょう』

『そうだね』

サクラとともに出品する作品を作るのだった。

グレイさんに見せると、出品許可がもらえた。もといた世界の剣を真似ただけなのね。まあ、黄金で剣を造るなんて普通出来ないしね

夜のオークションまで適当に遊んで稼がせてもらった。イカサマしてる連中には容赦なく指輪の力を使わしていただいた。

21時からオークションが開始された。ほとんどが興味ない品物だったが魔導書や禁呪書は買わせていただいた。昼間の稼ぎが無くなったけどね。

さて、私の品物の出番がきたみたいだよ。

『今回飛び入りでご用意させて頂いたのは、なんと黄金でできた剣トワイライトソードです。知っての通り黄金は錬成も難しいのですが、そちらのお嬢様は成功なされたみたいですね。ぜひ、錬成方法をお聞きしたいのですが？』

『秘密です♪』

誰が教えますか、むしろ私が教えてほしい。

『残念ですね。では、トワイライトの説明をどうぞ』

面倒だと仕方ないか、約束だし。

『制作者のノアと申します。この剣は黄金の特製をいかし、切れ味も良く壊れないように造りました。魔法を切り裂くこともできます。使い手しだいですけどね』

『では、試して見ましょう』

『分かりました。魔法撃って来て下さい』

『分かりました。いきますよ……詠唱省略！ F u r e i m u S
u t t o r a i k u !』

うわ、中級・・・Bランクか・・・あらかじめ軌道を教えて貰ってるから楽に切れるや。切ると会場から拍手がおこった。

『ご覧のとおり傷一つなく魔法を切ることができました。では、白銀貨10枚よりどうぞ』

『20枚!』

『30!』

この当たりになると金貨使えたいんだよね。あと、王様とかに渡す賄賂としても良いように見映えもよくしといたから売れるだろう。

『50!』

『100!!!』

『・・・・・・』

『くそ』

『他にいませんか?では15番の方が白銀貨100枚で落札です。』
『おめでとうございます』

ぱちぱちと拍手をする。どうやら手に入れたのはどこかの国の騎士か・・・・目的のものの落とせるかな?

『次の商品は竜族の少女です。まず一人目をご覧ください』

うわ、裸にされて首輪を嵌められたウサミミの少女がつれてこられた。会場がざわめく。

『今回はさきほどのお嬢様のお陰で反応薄いですね』

私のせい?なんでだろ?

『まあ、置いときまして、次の商品です』

次々に引っ張り出され売られていく少女たち。中には人族などいた。隣にいるサクラが手をにぎってきた。

『大丈夫、サクラは私が守るから』

『うん』

自分もどうなるかわからなくて不安なのかな?約束だけじゃなく私自身も守りたいし、安心してほしいな。(なでなで)

『んゝ♪』

くすぐったそうにしてるけど喜んでるな。

どうやら、サクラを可愛がってるうちに最後になったみたいだ。

『今宵、最後の商品となります。この商品は見目麗しく戦闘能力が高いため護衛にも夜のお供にしてもかまいません。そして、この奴隷は真祖と竜族の血を引くため頑丈で壊れにくいだけでなく美貌も衰えません!!』

あの子だなあいからわず拘束されてるけど、確かに身体に傷もないね。裸に拘束具とかいろいろ危ないねゝいくらになるか・・・いざとなれば・・・

『それでは、白銀貨10枚からどうぞ!』

『20!』

『25!』

『『35!』』

『40!』

『55!』

やっぱり狙う人多いか、とりあえず100でいくかな

『100!』

『200!』

あのおじいさんが敵かな?

『250』

あっちの女性もか・・・これでどうだ!

『400!』

『450!』

あのじい・・・こっち見て笑いやがった・・・ふふふ、遊びはここまで・・・ニールングの指輪の力・・・限定的な世界支配を見せてやる!

『460!』

『ぐっ』

うふふ、これ以上だせまい。貴方の予算や意識は指輪によって私の思う通りなのだから!

『ぐう、475』

まだ抗うかなら！

『500!』

『550じゃ！っ、己小娘』

『ニコリ〕570です』

『さあ、他にいませんか？』

『お兄ちゃん、いいんですか、ずるですよね・・・』

『いいのいいの、言ったよね。何としても手に入れる。戦力は欲しいからね』

そう・・・殺してでもね。

『分かりました』

サクラを守るためにも戦力が欲しい、私の言うことを聞いてくれる子が・・・

『他にいないようなので、258番の方が570枚で落札です。おめでとうございます』

『では、こちらにどうぞ。真祖になりますので主従の契約を行っていただきます』

『わかった。どうするの？』

『魔法陣の上口づけをし唾液を飲ませてください』

『わかった』

驚いたけど、可愛いしいや。頂きます。

『んーんっ!』

やっぱり、嫌がるよね、でも・・・なんだろゾクゾクするもつと虐めたくなるな・・・。

『・・・ん・・・あっ・・・んぷうっ・・・んっん!・・・』

『・・・ちゅ・・・くちゅ・・・ん・・・』

甘くて柔らかくて美味しいな・・・いつまでもつづけたいがそういうわけにいかないか、ほら飲んでね。

『んー!っ』

よしゴクゴク飲んでね。

『ぶふあっ、これでいいの?』

『……はあ……はあ……』

『えっえ、もうすぐ始まります』

なんか魔法陣輝きだしたな。

『っん！があ！あああああああ！！！！』

『苦しみだしたよ！』

『大丈夫です。貴方を主人とし新たに生まれ変わります。記憶をなくしてね』

『ちょっとそれって』

『危ないのです、主従の契約とて完全ではないので記憶を消してしまえばより安全となります。あそこまでの力を持っているため仕方ない処置です』

『でも……』

『もう止めることもできませんしね』

『アアアアア……アア……あ……』

『仕方ないか』

かわいそうだけど……

『それに、もともと記憶が消えていたみたいですし』

なら、そのぶん可愛がってあげるか

『わかった』

『……う……っあ……うう……』

『どうやら終わったようですね。こちらが首輪の制御術式です。再発行できませんのでお気を付けください』

『了解』

『……』

さて、大丈夫かな？首輪と手枷を除く拘束具を外してこちらに引き渡される女の子。

『おいで』

『……はい……ごしゅじんさま……』

なんか無表情で言われると人形みたいだな。サクラのところに戻ろう。

『名前は？』

『・・・わからない・・・です・・・』

そっか名前の記憶ないんだな

『ん〜と、じゃあおまえは今日からヨミだ』

『・・・よ・・・み・・・』

『うん、ヨミ』

『・・・よみ・・・わたしは・・・よみ・・・わかりました・・・ごしゅじんさま・・・』

さて、サクラのどこについた。

『サクラただいま』

『お帰りなさい』

『この子はサクラ、私はノア。サクラこの子はヨミって名前にしたよ』

『サクラです。よろしくね』

『・・・さくら・・・ごしゅじんさまは、のあ・・・ごしゅじんさまは、のあ・・・おぼえた』

『さて、今宵のオークションはこれにて閉会となります。またのおしをお待ち申し上げております』

終わりたいだね。宿にもどるか。

『宿にもどろサクラ、ヨミ』

『はい』

『・・・（こくん）心配だなヨミの手を握っていくか。

『っ！・・・あ』

『びっくりした？ いや？』

『・・・（ふるふる）』

『んじゃいくよ』

サクラの手も握り宿への道を進む。これって両手に花？

宿につきお風呂に入り就寝順番をする。もちろん裸にされた。ベツドへ行きヨミを呼ぶ。

『ヨミ、こっちへおいで』

『……（ふるふる）』

怖がってるみたいだね。ガクガク震えてる。

『ヨミ……来なさい』

『……（こくん）』

震えながらきたね。ベッドに近づいたヨミの手をとりベッドへと引きずり込み抱き寄せた。

『……ひ……』

『ん～よしよし（すりすり）』

頭を撫でながら、すりすりする。柔らかくてすべすべして猫耳が良い感じで気持ちいい。こんな美少女とはいいい買物だった。

『ん～』

びくびくしつつも気持ち良さそうだな……ん、サクラがくっついてきた。

『お兄ちゃん……わたしも……（もじもじ）』

嫉妬？もう、目に涙うかべて可愛いな～。

『大丈夫。サクラもちゃんと可愛がってあげるよ』

『……本当？捨てない？』

『大丈夫だよ、捨てたりしないよ、ちゃんとそばにいるから』

『うん♪』

これから大変そうだな～サクラとヨミを守らなきゃね。あと、気になるのは、あのじい……少し世界支配に対抗してたな……気を付けなきゃ、二人を守るために……

『～♪明日はどうするの？お兄ちゃん♪（すりすり）』

『うん、ヨミや僕らの服を買いに行こう。さすがにドレスで旅は「できるよ」……まあ、予備とか動きやすいの買う。ね、ヨミも動き安いのがいいよね？』

『……（こくこく）』

『だそうだよ？』

『二人とも可愛いやつも買わなきゃいけないよ』

『黒く動き安いのでもいい』

『だめ』

『・・・まあ、あとは技術みに付けたいな』

『学校かどこか？』

『学校か・・・まあ悩んでも仕方ない明日街をみて決めよう』

『・・・zzz』

『寝ちゃったね、安心したのかな？』

『さあ、でも可愛いペットができた感じかな』

『妹じゃなくて？』

『首輪してるし、小動物ぽいし猫耳だしな』

『猫耳？』

『うん、私の世界にいた小動物だよ。可愛いよ』

『みてみたいね』

『それに、妹もペットも奴隷もかわらん、どっちにしても可愛がって守るだけだしね』

『歪んでるよ・・・あれ、その理屈なら・・・わたしも？』

『じゃお休み』

『まって、私お兄ちゃんにとってペットなの？』

『いや？』

『いやに・・・』

『いや？』

『いやじゃないです・・・うう』

『顔真っ赤にして可愛いな。ん』

『あ』

『お休み』

『いま、き・・・きす・・・うう、寝られるかな・・・大好きだよお兄ちゃん・・・お休みなさい・・・（ちゅ）』

第8話「交易都市オルニオン」オークション」(後書き)

PV一万こえた

そして三人目です。

剣の名前に悩みました。適当に付けました。

カジノで使ったイカサマはニールベリングの指輪による限定的な世界支配。神や神力持つて存在には抵抗されます。あと、精神力強かったり魔力が高ければ少しは抵抗できます。今回でできたおじいちゃんがそのたぐいです。

でわ、また明日更新できれば明日に会いましょう。

弾9話「交易都市オルニオン・クレセント商会」

翌朝、朝食を食べ終え街にヨミの服と旅の準備のため買い物へ出掛けた。交易都市というだけあり品揃えがいい。

『たくさん品物があるね』

元の世界で見た品や知らない品までいろいろな物がある。

『そうですね。魔導具から食品まで大陸各地より集まっています』

『ふむ、早くヨミの服買おう。まだ白銀貨10枚はあるから魔導具で揃えよう』

『わかりました。どこに行きましょう・・・場所分かりません・・・（しゅん）』

気にしなくていいのに・・・ん？

『君達どうしたの？』

『えっと、魔導具の防具売ってるとこ知りたいんですが・・・』

『いいよ、教えてあげる、ついておいで』

『あっありがとうございます』

・・・怪しいな・・・でも、本当なら楽につけるけど・・・警戒しておくか。

『ヨミ、サクラの近くにいてね』

『・・・（こくん）』

いつでも戦えるようにしとこう。

『こっちだよ』

だんだん人気が無くなってきたな。これはいよいよかな？

『本当にこっちなんですか？』

『そうだよ、この先に店があるんだよ・・・』

『・・・ん』

『・・・なに？』

『・・・たさんの・・・けはい・・・』

『分かった。サクラをまもって、ヨミも怪我しないようにね・・・』

』

『どうしたの？』

『何でもないよ。サクラ、ヨミと一緒にいって』

『はい、おいでヨミちゃん』

『・・・・・・（こく）』

『どうした？早く来い』

『はーい』

さでどうなるかな。

開けたところに着くと予想通り数人の男達が私達を取り囲んだ。

『これはどういうことかな？』

『どうもこうも、おまえ達は、身ぐるみを剥がされ売られるんだよ！』

『くすくす』

『何がおかしい』

だってねえ、神か神殺しがいると思ってたのにこれじゃあ・・・・ただの餌ね。

『よろしいのですか？』

『何がだ』

『私達・・・・いえ、私を捕まえるのにこの程度の戦力で・・・・』

『馬鹿なことを、こっちは大人が20人もいるんだ』

『そうですか・・・・サクラ、ヨミ下がっていてね』

『はい』

『・・・・・・（こく）』

『やろうってのか、おもしれえ！』

『一応最終勧告です。投稿しなさいな』

『ふざけんな！！』

『よろしい。では、殺してあげます』

『教育してやれ！』

近づいてくる愚か者の方に模倣の力でヨミから貰った吸収能力を使

い、迫ってきた敵を一気に引き寄せる。引き寄せられた雑魚はバランスを崩し、隙を作った……。もちろん逃すはずもなく襲ってきた三人をダーインスレイウで一刀両断してやった。

『あと、17人……。』

『くっ』

次は五人か……。昨日手に入れた魔法つかうか……

『ベーオウルフ』

この魔法は禁呪に指定されていた。5万以上の膨大な魔力を一度に使用しその総てを身体能力強化に使用されるが、肉体を無視し限界以上の強化を施すためほとんどの人は使った瞬間死んでしまうため禁呪になった魔法だ。

『馬鹿な!』

一瞬のうちに5人を斬り殺した。

『あと、12人』

〔ドゴッ〕

あれなんか後ろでもすごい音が……

『……。あと……。はちにん……。』

後ろを見ると、嘲笑うヨミによってやられただろうお腹に穴が空いた4人が倒れていた。目が虚ろだけど平気かな？

『ば……。化け物……。』

失礼しちゃうな。こんな可愛い子達を捕まえてさ。

『たったすけてくれ!頼まれただけなんだ!』

ん?頼まれた?

『誰にだ』

『貴族にだよ。あんたらを捕まえれば買ってくれるって!』

『他は?』

『わからねえよ……。フードで顔も隠してたし……。話したんだ!助けてくれ!』

『くすくす、残念だけど話したら見逃すなんて言ってないし、なによりこのダーインスレイウを抜かせたんだもはや和解も見逃しも

無い・・・ただ殺すだけ、この子が満足するようにね』

『っひい』

『それに私基本的に人嫌いだし、信じないからね』

『やっやめ!』

『さようなら』

『ギャアアアアアア!』

ふう全員殺し終えた。身体の所々痛いなべーオウルフの反動か・
・どうせ不死だし平気だけだな。

『お兄ちゃん、やり過ぎじゃ』

『サクラは優しいね。みせしめの意味もあるからね。』

『みせしめ?』

『後ろに誰かいるみたいだから、こんなふうになりたくなかったら
私達から手を引けっていうメッセージにしてみた』

『そうなんだ』

『それに、こんなゴミはいらないでしょ』

『お兄ちゃん・・・』

『私ならともかく、サクラとヨミに・・・私の物に手を出す奴は誰
だろうと排除するよ』

『お兄ちゃん・・・』

顔赤らめてるな、ヨミは平気か?

『ヨミ、大丈夫?』

『・・・うん・・・へいき・・・おなかすいた・・・』

『何か食べる?』

『・・・』

『遠慮しなくていいよ』

『・・・ちが・・・のみたい・・・』

えっ血?

『えっと・・・』

『ヨミは真祖の吸血鬼でもありますから・・・』

『・・・だめ・・・？』

ぐっそんな上目遣いで見られたら・・・サクラといいヨミといい・・・可愛いなく

『いいよ、血を吸われたら吸血鬼になったりするの？』

『・・・だいじょうぶ・・・だとおもう・・・』

『そっか、いいけど一つ約束だよ私からしか吸っちゃダメだよ。いい？』

『・・・うん・・・わかった・・・』

『なら、どうぞ』

『・・・（こく）』

ヨミを抱き寄せると、すぐに首筋に噛み付いて来る。少し痛いけど平気だな。しかし、ヨミの唇と舌が・・・

『・・・ん・・・ちゅ・・・ちゅー（れろれろ）』

10分くらい吸われた・・・普通なら危ないぞ！

『・・・（ペロペロ）』

『もういいの？』

『・・・うん・・・おいしかったよ・・・』

『なら、よかつ・・・た・・・』

『ど・・・どうしたの？お兄ちゃん』

『？』

『牙が・・・生えてきた』

『うそ・・・』

『ああ、大丈夫だよ。模倣のせいだから』

『そうなんだ・・・よかった』

『うん、これは私も・・・』

『どうしたの？』

『何でもない、それより店探そう・・・全部斬り捨てるんじゃないかな』

『表通りにでて聞こうか』

『あゝ』

なんかみずぼらし16くらいの少女が声をかけてきたな

『なに？』

『っひ』

『怖くないですよ』

『・・・お願い「やだ」が・・・そこをなん「やだ」・・・うう』

『お姉ちゃん、話しぐらい・・・』

『勝手にしろ（ぷい）』

『で、なんのようでしょうか？』

『はい、こいつらのアジトを潰してほしいんです。官僚と繋がって
いて騎士は動いてくれないんです』

『それは・・・』

『アジトの場所？』

『あの建物です』

あの遠くに見える緑の屋根のところか

『うけて「やだ、聞いただけ」そんな・・・』

『依頼料払えるの？』

『それは・・・』

『なら、自分達の手で勝ち取るんだな』

『勝てるはずありません！武器も無いんですから！』

『そうか、ならあきらめたら？』

『それは・・・』

『まあいいやそれより、魔導具扱ってる店案内してよ』
『嫌です！』

『お金ですよ？』

『う』

『今日食べる物にも困ってるんでしょ？』

『わ・・・わかりました、こっちです』

『いくよ、二人とも』

『はい』

『・・・』（こく）やっと店にいける。さて、どうするか。

30分後、廃れた館についた。ここか？クレセント商会って書いて有るけど。

『ここか？』

『そうですよ、このあたりじゃここが品揃えいいです』

『そうなんだ』

『はいってみよ』

『・・・（こく）』

『お代！』

『入ってからだ。品揃えよくなかったら払わないから』

『そんな・・・』

『あまえもこい』

『僕はおまえじゃない！フラウって言う立派な名前がある！』

『フラウいくよ』

『あつまて！』

さて、館に入ると12くらいの茶色かったショートカットの女の子と30代のおばさんがいた。

『なんだい、フラウじゃないかい、ひやかしなら帰りな』

『冷やかしじゃない、案内してきただけだ！（ふん）』

『そうかい、あんた達が客かい？』

『そうです、この子に会う服を探してるんです』

『くる場所間違ってるよ。ここは貴族のお嬢ちゃん達が来るとこじゃないよ。危ない目に合わないうちに帰りな』

『私達貴族じゃないです』

『そうなのかい？どっちにしろ・・・』

おばさんとサクラが話しているが、私はもう一人の少女の方が気になるな。魔力が大きいな魔導士としてはどうだ？お互い見つめあっていたが・・・

『何か？』

『いや、君の美しさに見とれていただけだよ』
『嘘ね』

『美しいって思ったのは本当だよ？』

『・・・・・・』

『私はノア。貴方は？』

『・・・・・・答える義務は無い』

『君魔導士だよ？』

『・・・・・・』

あらいつちやた。

『あの子はつい最近こっちに来た子だよ。名前はルシアだよ』

『あの子はギルドランクBの魔導士だよ、我社クレセント商会を最
肩してもらっててね。あんたあの子を狙ってるならやめときな』

『氣になったただだよ』

『それより、服だ服』

『お金はあるのかい？うちは高いよ』

『白銀貨17枚だ』

『・・・・十分だね。贅沢しなきゃね』

『ヨミには魔法防御高いのがいいね』

『わかったよならこっちだね』

『私は適当にみて回るね。フラウはあっち手伝ってあげて』

『報酬はずめよ！』

『さてと、みてまわるか』

しばらくして、男物が置いてあるところに付きえらんだ結果。黒
色の魔法できた布地を何種類かえらんだ。

『さて、あとは武器とか日用品にキャンプ道具だな・・・・』

30分たち、キャンプ用品などのアウトドアグッズを購入・・・・値
段すごい高いが・・・・

『ん？これは魔導具の作り方か・・・・よし、この一式も買うかな』

あとは・・・こいつだな』

ロビーにもどると誰もいなかったので仕方なく魔導具の制作方法を読んだ・・・さらに1時間たち、遅いな・・・どうせ買うし作っておくか・・・取り出したのは先程えらんだ魔法の布地・これを模倣と先程得た技術を使いエンCHANTする。失敗したものは新たにコピーし直す。そして、ついにできた・・・黒いシャツに黒のズボンと黒のコートもちろん魔力にもいわしたチート使用品ですよ。対物対魔はもちろん状態異常もふせぐ優れたものです。剣帯も付けたし・・・着替えるか・・・

着替え終わりロビーにもどると皆いた。

『やほ』

『あっ』

んサクラとフラウ固まったな。どうしたんだろ？

『なんだいそれ、そんな服うちになかったが・・・』

『ああ、布地とかもらって作った。これ値札ね』

『そうかい、その子らが選んだ奴も纏めてかい？』

『纏めてね』

『しめて、白銀貨17枚と金貨15枚だね』

『高いな』

『あんたが選んだのが高すぎるのさ、魔導具作成セットとか銃とかね』

『なら、しかたないなはい』

『まいど、これポイントカードね』

『わかった。ありがとう』

『サクラとヨミ似合ってるけど・・・ヨミ、その格好で蹴ったりするのは・・・』

『・・・へいき』

『ならいいか』

『お姉ちゃんはカッコイイよ』

『・・・(こくこく)』

『ふん』

『ありがとう』

『さて、外にいくか』

『まいどあり』

ほくほく顔のおばさんに見送られながら外にでた。

『フラウ、これ報酬な』

先程買った銃を渡す。この世界の銃の弾は魔力で作り出すみたいだ。カードリッジを使うと威力が跳ね上がるらしいけどね。勿論高価な品ですよ。

『いいの！こんな高価なもの・・・』

『それを使いどうするかは自分できめろ』

『・・・わかった』

先程の広場にもどるとヤクザが子供達に暴行を行っていた。

『あいつら！やめろ！』

子供達の方へ走っていたな。さて、どうなるかな。

『お、きたか！後ろの奴が俺達の仲間をやってくれた奴だな！』

『うるさい、その子達から離れろ！』

『いいぜ、おら！』

蹴り飛ばしたな。

『ぎゃ！』

『この・・・』

近づくヤクザにフラウは・・・

『死ね』

『は？』

近距離から銃の乱射を受けヤクザは倒れた。

『てめえらただじゃすまねぞ！覚えてろ！』

『さて、私達は帰るよ』

『わかった、これは僕達の問題だ』

『わかってんじゃん。じゃあね』

『お兄ちゃん・・・』

『いくよ』

『はい』

帰路につく私達。屋根の上を見ると人影がみえた。

弾9話「交易都市オルニオン」クレセント商会」(後書き)

次回はつづきだよ。メール上限に到達しちゃったのです(＜|＞)

第10話「交易都市オルニオン」生きるために前編」(前書き)

ルシアのイメージはな〇はP o r t a b l eの星光の殲滅者シュ〇ル
すぐに11話執筆にはいります

第10話「交易都市オルニオン」生きるために前編」

ルシアSide

私はいま屋上からスラムにある広場を見下ろしている。眼下では
男数人が子供達に暴行を加えている。

『ひどいですね。これがこちらでは当たり前ですか』

私は別世界から召喚された。私のオリジナルにやられ消える存在だったが・・・気づけばこちらの世界に召喚されていた。私を召喚したのは老夫婦だった、彼らは娘が欲しかったが出来なくなり、駄目元で召喚儀式をしたところ私が現れたらしい。本来私は使い魔のカテゴリになるらしい、その後三年間共に過ごし老夫婦は生きを引き取った。私にルシアという名とこの世界の魔法技術、魔導機技術を遺してくれた。問題が無いわけでは無いが・・・この肉体を維持するために主の魔力が必要なのだ。なんとか魔石で繋いでいるが限界はすぐくる、なにより私は魔導士だ魔力が無くては戦えない。彼等が遺した最終の命令・・・いや、願い・・・私に生きろといった願いを叶えるために・・・

『Master“』

『そうだね、あの子達を助ける』

“Yes, Master・・・“』

『シュテルどうしたの？』

『“生命反応4・・・魔力測定開始・・・魔力値2721万・・・魔力値5万・・・測定不能・・・4万・・・“』

『故障では無いわね。さっき修理したばかりなんだし、様子見る』

“Yes, Master”

測定不能か・・・一億以上・・・私達の世界では考えられない数値・・・あの四人は、さっきクレセント商会出会った人達・・・
『やめろ!』

しばらく見ていたがあちは助ける気なしか・・・銃だけ与えるだけ与えるとは・・・報復されるに決まつてる。よけいなことを・・・決行を今夜に決定。

『今夜行く』

“Yes, Master”

つ、ノアとか言うのはこちらに気づきましたか……

……どうやら、問題無いみたいですわね。

『目標はすでに調べている・・・問題は魔力のみ・・・こるより、私は魔力消費を抑えるため寝ます。時間になったら起こしてください』

“Yes, Master”

ルシア Side End

宿付き就寝前にサクラが心配そうに窓の外を見ていた。

『
・
・
・
・
大丈夫かな』

背後から近づき声をかけてみた。

『銃あげたんだから大概のことなら平気でしょ』

『きゃっ、びっくりした……』

『大丈夫だよ、それより……』

『なっなに？』

『血吸わせて』

『えっ、ええええ！』

驚いてるなく牙生えたから試してみたくなったからね。

『なっなんで？』

『吸ってみたいから・・・だめ？』

『うう、お兄ちゃんになら・・・いいよ』

落ちた。

『わーい（かぶ）』

綺麗な首筋に噛み付きサクラの血液を吸ったり舐めたりする。

『・・・痛・・・あ・・・あ・・・うう』

顔真っ赤にして可愛いな、それに・・・すごく美味しいし。

『はあはあ、お兄ちゃん・・・もう・・・』

『ちゅー』

『や、もう・・・らめ・・・きゅう・・・』

あら、身体がびくびく痙攣してる・・・もしかしくてもイッタの
かな？

『・・・あ・・・』

気絶したか。ちょうどいいや狙った効果と違うけど。

『・・・（じー）』

う、ヨミが欲しそうに指をくわえてこっちを見てる。したないな。

『ヨミも吸わして』

『こくこく）・・・わたしも・・・ほしい』

『んーじゃあ吸い合いっこしよう』

『・・・（こく）』

『『かぶ』』

『『・・・ちゅ・・・ちゅ・・・（ぺろぺろ）』』

あゝ気持ちいい病み付きになりそうだな・・・

十分後

『・・・あう・・・』

ぼーとしてるヨミとサクラを脱がし、ベッドへいれ布団をかける。
私は吸血鬼じゃないけど血をエネルギーにもできるし、なにより血に知識が詰まっている。吸血鬼はこの情報を利用し記憶操作するんだな。

『それにしても、まさかあんなビックネームを殺してるとわね。さて、夜の散歩しますか・・・』

窓を開け夜空に飛び上がることができた。

『お？おーうつわっわ！』

危ない、ぶつかりかけた・・・飛びなれないとダメだな・・・ちゃんと窓しめて・・・『我、ここに不可侵にて見えぬ堺をもうける、VanishuField』

これで大丈夫だろ気配隠蔽に視覚遮断で防御能力もあるしね。

『さて、いくか』

適当に散歩・・・今日通った道を空からたどっていく。

緑の屋根・・・真っ正面に警備が二人・・・気配隠蔽、魔力隠蔽共に良しと・・・

『ベーオウルフ』

身体強化を施し真っ正面に着地する

『目的地到着♪』

『なんだ？ガキがこんなところに・・・』

『おっ可愛いじゃないか、お兄ちゃん達と遊んでくれんの？』

『うん、遊ぼ♪』

『おうよ！』

『おっおい！』

『お兄さんもね』

『『えっ』』

二人を瞬くまに首を斬り落とした。痛みは感じてないと思う。

『さて、遊びましょうか・・・命を賭けたかくれんぼを・・・』

『GameStart』

ルシアSide

目標地点到着・・・魔力は残り1万・・・全力戦闘は10秒で
きればいいほうと思ひましょう。

『Master、目標二名確認“』

『やはり、地下にも見張りはいますか、他に侵入経路はありません
し・・・行きます』

“『Yes, MaiMaster“』

私は地下道より潜入を開始した。荷物搬入用に作られた川を潜り地
下施設から地上に向け出発した。

『MissionStart』

“『Yes, MaiMaster“』

二人は同じタイミングで突入した。

ルシアSideEnd

さて、中に入ったけど・・・どこからいこうかな・・・一
階から・・・いな、結界を張り逃れなくさせよう。

『我が名の元に、この空域を時の彼方へ誘え・・・時の封鎖！』
これで大丈夫・・・さて、2階へいこう

『なっんだお「邪魔」っが、くそ』

「ビービー」

ん？あははは、警報か？どうしよ……ま、いいか

『っ！ライトニングブラスト！』

扉が開いた瞬間、魔法を撃ち、出てきた敵を感電死させる。

『壁――よし、大丈夫みたい♪』

『今の音はなんだ！』

『上からだ！いくぞ！』

下から足音がたくさん聞こえる。とっと屋上にいくか……

屋上につくと、一番奥に行き詠唱を行う……詠唱するのは、
炎系禁呪のひとつ。

『……』

屋上に三十人くらいがなだれ込んでくる。

『穰ちゃんが「死んでね。惑え炎獄」ちよっ』

『ゴオオオオオオ！！』

『ギャアアアアア！！』

後に残ったのは途中まで溶け残った階段だけだった。

『わあ、凄い威力だね……のこってる気配は……あれ？』

ルシアSide

見張りに対して不意打ちを行う。

『BurasutoShoot』

『“Yes, Master, BurasutoShoot”』

小さな魔法弾を二個つくり見張りの二人の頭に放つ。

『なっ』

下顎より上部が無くなった死体が二つ軽い音をのこし倒れた。

『・・・少し調べます。警戒をお願いします』

『“Yes, Mai Master”』

二つの死体を調べ懷から鍵束を抜き取った。

『これでよし・・・』

扉を調べ、入手した鍵を使い扉を開けることができたので、これより内部調査を開始しましょう。

しばらく一本道を通り地下倉庫にでた・・・

『“倉庫内部に生命反応を8確認”』
『了解』

私は近くの木箱に登り伏せて、視界を確保しつつばれにくい場所についた。次に行うことは指揮者を見極めること。

『おい、そこは右側だ。』

『へい』

『こっちはどこ置きやすか？』

『それは左だな。』

あいつか・・・今は様子見ですね。

10分達たったけどどうするか・・・

『“Master、目標に動き有り”』

『どこいくんですか？』

『上で何か合ったらしいから聞いてくる！さぼんじゃねえぞ！すぐもどるからな！』

2階の扉こでていった指揮者を見ていた・・・これはチャンスですね。

『BurasutoShootスタンバイ』

出ていった瞬間に

『“Yes, Mai Master, BurasutoShoot Standby”』

2分後、立ち上がり行動を開始した

『Shoot』

『“Yes, Mai Master”』

放った8個の魔法弾は8人の頭部を背後から音も無く撃ち抜くことに成功した。

『“残存魔力9000”』

『今のところ順調ですね』

『“生命反応1接近中、先程の生命反応と合致”』

『わかった』

2階にある扉の影に隠れ来るのを息を潜めて待つ。

『おい、ちゃんとやって「えいっ！」ぐはぁ』

デバイスで思いっきり叩いて1階に突き落としてやった。魔力節約のためです。1階に降り倒れている目標の背中を踏み付けた。

『がっ！いてえええ！』

どうやら折れてるみたいです。都合がいい。

『誰だこんなことしやがったのは！』

『黙れ』

デバイスで折れた腕に体重を賭けて押してやった。

『ぐっああああ！』

『静かにしてください。苦しみ悶えたいですか？それとも、あそこの死体みたいになりますか？』

『っひい、わかったからやめてくれ！』

『質問です。貴方達のトップはどこにいますか？』

『それは……』

腕をグリグリする。

『痛い痛い痛い痛い痛い、わかった言う！』

『どこですか？』

『この2階から奥へいけば書庫がある。そこにある燭台に火をともして、本棚にある赤緑青のうち赤の表紙の本を暖炉の上にある小さな本棚に入ればボスの部屋にいける！』

『……嘘ですね。本当のことをいってください』

『本当だ！信じてくれ！』

これは、試してみましよう。首をロープで閉めていく。

『ぐえ、やめえ』

『本当のことを言うまでやめません』

『……わかったからやめ』

やはりそうですか

『本当は緑を置くんのだ。これでいいだろ？』

『ええ、ありがとうございます。さようなら』

『つぎや』

そのまま絞め殺します。後のために生かすわけにはいきらないのです。4分後、動かなくなりました。念のため確認し2階に移動します。

2階の廊下を進んでいるとシュテルが報告をあげてきました。

『M a i M a s t e r、空域に大規模結界を確認、封鎖され外部に脱出不可能な状態です“』

『撤退は不可能ですか……結界を破壊出来ますか？』

『不可能。魔力が足りません“』

『では先に進みますよ』

『“Y e s , M a i M a s t e r “』

奥に進み書庫につきました。他の扉もありましたが、先に進むのを優先します。

『ここですね』

言われた通り燭台に火をともし、緑の本を暖炉の上にセットすると本棚が動き隠し通路が出現しました。

中に入ると本棚が元に戻った。これは先にいくしかな無いですね。

しばらく歩くと前方から矢や魔法弾が飛んできた。騙されましたか……まずいです。

『“P r o t e c t i o n “』

シュテルがバリアを張ってくれましたが問題は……

『“魔力残量7500“』

『くっ』

その後も攻撃はつづきます。仕方ない。

『Protectionを解除しAkuseruFuraiyaをお願いします』

“Yes, Mai Master, AkuseruFuraiya
“『

バリアを解除し、加速した私は空中を足場にしながら回避行動をとりつつ前進します。

『っ』

致命傷になる攻撃のみ手のひらサイズのバリアで防ぐ！

“『右腕に損傷、戦力2%低下戦闘行動支障無し“』

く、杖形態のシュテルを使い矢は叩き落としているけど……

“『前方より高エネルギー反応“』

『Protection!』

“『Protection“』

っく、ライトニングブラストか……くっ、このままじゃ持たない……

『Protectionを左前方に円錐形状にて展開!』

“『Yes, Mai Master“』

『くうっ』

“『右腕で損傷、戦力20%低下戦闘行動続行可能“』
もう少し!

“『前方よりFreezeLance“』

『このまま行きます』氷の槍を足場にしていける!くっ、両足にかすり傷……問題なし。

“『目標距離到達まで10“』

『到達と同時にBurasutoFire!』

“『Yes, Mai Master“』

目標確認、排除する

『行けBurasutoFire!』

『“BurasutoFire”』 『『『ギャアアアアアア！
』』』

〔ドォォン！！！！〕

『はぁはぁ、やったか被害状況』

“右腕、左足重傷、左腕、右足軽傷、戦力20%、残存魔力60
0、戦闘行動可能。撤退不可能、休息を提案します”』

『残念ながら意味ありませんね』

血が流れる右腕を左手でシュテルもろとも押さえ、左足を引きずり
奥に向かう。

『休息しても魔力は肉体維持に減ります。ならば、思いを貫くのみ』

第11話「交易都市オルニオン」生きる為に後編」

とは言ったものの一撃見舞うだけの魔力もない……ならば生命を魔力に変換し、残りの魔力と合わせ一時的なブーストを行う。これは最終手段にあたる。私は魔力変換能力をこの世界に来るとき会得した。変換できるのは私の体内に入った食べ物や思考性の無い物だけだ。攻撃魔法など相手の使用した魔法を変換することはできない。そして、生命力を変換するということは存在できる時間が無くなることを意味している。

『シュテル、生命力を魔力に変換します』

『よろしいのですか？』

『ええ、フラウや子供達のためです』

『Yes, Master』

さあ、最後の戦いへ向かいましょう。

奥に行き、扉を開けるととてつもない攻撃が飛んできた。反射的にシュテルを構え全力でバリアを展開する。

『Protection』

『つぐ!!があ!!』

バリアを展開するが即座に押し負けシュテルに直撃し、吹き飛ばされる。

『はああ、いったい……なにが……』

『……Master……』

『シュテル!!』

シュテル……デバイスに亀裂がはいっていた。

『ほう、以外に頑丈なのだな』

『誰……?』

そこには、若干肌が黒めの灰色のシャツに赤いスポンを履いた少年がいた。

『人間ごときに名乗る名はないな』

なに、この圧倒的な力は……

『く、一撃すら見舞えないとわ……』

『人間ごときに我を傷付けようとは愚かな……喜べ貴様で遊んでやる。もう一匹のネズミがくるまでまな』

『あぐ』

先程の攻撃で両足が使い物にならなかった私の首を掴み先程の部屋に戻る少年。

『離っせっ』

『黙れ!』

『があっ!』

お腹を蹴られ先程の部屋に蹴り入れられる。

『我が主よ、私めが』

『ふん、良かる我を楽しませよ』

『御意』

『……なにをする気ですか』

『なに、玩具で遊ぶだけです』

『私が玩具ですか』

『ええ、人など我等の玩具です』

『ビリっ! ビリビリ!!』

『っう、この変態』

『いい格好ですよ』

手を気持ち悪い触手のような物で吊り下げられ、胸元から服を破り取られた。

『くっ』

『さて、たっぷり虐めてあげます』

触手を鞭のようにしならせ打ち付けられる。

『あぐう!』

『ほらどんどんいきますよ! ほらほら、貴女に殺された部下達の怨みです。身を持って体験なさい』

『ぎいあ！あぐっ！』

『ふむ、なかなかいい声だ』

『・・・はあ・・・はあ・・・』

身体中が痛い・・・なんで・・・もう、魔力も生命力も無いのに・・・

『ふふふ、いいことを教えてやる。貴様を拘束してる触手から最低限の生命力と魔力補給は行われているのだから消えることはできません異界の娘よ』

『・・・そんな・・・』

『くっくく』

『主様、もうひとつ余興を考えました』

『やってみせよ』

『はは、直ちに。我が名の元に瞑府より蘇れ我が下僕よ！』

顔の無いゾンビやスケルトンが床からはい出て来る・・・

『まっまさか・・・』

『くくく、そのまさかです。さあ、お前達たっぷり仕返ししてあげなさい』

ゾンビ達は蝋燭を持ち、スケルトン達は鞭を持って迫ってきた。

『っ、あつ、あついい』

〔じゅー、バシン〕

『あちゅっ、あぐう』身体中に蠟を垂らされそれを鞭で剥がされる。

『・・・ゆる・・・さな・・・い・・・ぜったいに・・・』

『ふふ、気絶しましたか、誰が休んでいいといいました？』

『あぐうううう！！！！』

『そうだ気絶するたび電撃を食らわせろ』

『御意』

『あがああああ！や、やめ、あつぎゃあああ！！』

数十分ルシアの悲鳴が部屋からなりやむことは無かった。

ルシアSideEnd

ふう、ようやく1階と2階を皆殺しにできたな．．．．ん？なにか構造的に変だな、探索魔法は使ってるし．．．．嫌な気配もする．．．．魔法がだめなら気だな．．．．精神を落ち着け周りと一体化する．．．．なんてできるはず．．．．あれ悲鳴が．．．．気のせい？もつかいしてみよ。身体の中の気を練り上げて糸のように放出する。

（あっぎゃあああ！）うわ！これは．．．もっと深く．．．映像も見えてきたな．．．．

（もう、やめ．．．痛い痛い痛い、痛いの熱いの、やめて．．．壊れ．．．．いやああああ！！）

っこれは．．．．ルシアって子にもう1人の男こっちみて笑ってやがった．．．．ふふふふ．．．．私に喧嘩売って来た．．．．なにより、ルシアを．．．．よくも．．．．あれは私の物にしようと思ってたのに．．．．殺してやる。あれ？そんなこと思って無かったのに．．．．前の世界ではこんなこと無かったのにフレイヤと融合したせいかな？気に入った子や可愛い子を手に入れたくなる．．．．じちようしよ。さて、いくか．．．．走りながら片っ端から怪しい場所を破壊するしかないとは．．．．皆殺しするんじゃないかな。くそ、どこだハズレ多すぎ．．．

（たすけて、たすけて、たすけて、いや、もう、たたかないで、痛い痛いの、いや、熱い、あちゅいの、痛い、あっあああああ）

（もうちよつと耐えて！すぐ助けにいくから！）

（はや．．く．．もう．．いや．．なの）

やばいな、精神大分壊れかけてるな．．．やめだ．．．真面目に探すなんて．．．．

『やめえだあああ!! 黄昏よりも暗き存在、血の流れより紅き存在、時の流れに埋もれし偉大なる汝の名において、我今ここに闇に誓わん』

そうだ奴に向かって撃てばいいんだ・・・ふふふ。

『我等の前に立ち塞がりし全ての愚かなるものに我と汝の力もて、等しく滅びを与えんことを! 竜破斬!! 30倍だ!!!』

竜破斬を地下にいる少年に向けぶっ放した。竜破斬は途中にあるものを歪曲空間すら消し飛ばし少年へ竜破斬は命中したかのように見えただけ。

『くくく、なかなかやるでは無いか』

嘘だでしょ? 竜破斬を両手で止めてる。

『なかなかやるでは無いか』

むかつくです。下に降りると、ゾンビとスケルトンを見つけ、ルシアを助けるため移動する。

『ヘイスト、ソニックムーブ、ベーオウルフ、ライトニングスピード、グラビトロンコントロール!』

サクラからいただいた多重詠唱で覚えてる限りの身体強化や速度UPを掛け走り抜けた。ゾンビやスケルトンは衝撃波により吹き飛んだルシアは吹き飛びかけたところをお姫様抱っこにて回収した。衝撃波はバリアで防いだ

『速いな』

『己、我が部下を「黙れ」殺して「わかった死ね」っえ?』

その瞬間ルシアを浮かし、斬り殺した。瞬時に落ちてきたルシアを抱き直す。

『おい、平気か?』

『ああ、ぶたないで、なんでも、言うこと聞くから、痛いことしないで・・・ああ』

『もう、大丈夫だよ』

『いや、殺して・・・』

『いやだね。ルシアは生きるんだ』

『生きる……』

『そうだ』

『私をいじめない？』

『さあ？それはわからないけど、私は可愛いがるね。ロシアしだいだが殺す気は無いし殺させる気も無い』

『なんでそこまでの……』

『さあ、気に入ったからかな。私はロシアが欲しい』

『あ』

『どうする？』

『わかった、生きるよ』

『もう茶番はいいか？』

『茶番じゃない！』

『知るか、どっちにしろ貴様らはここで死ぬんだからな』

『逆にお前を殺してやる』

『できるならやるがいいさ』

『あ（ガタガタブルブル）』

『ロシアは下がってて、これお守り』

左手を取り薬指にニーベルングの指輪をはめる。

『あっあの』

顔真っ赤にしてるや、ずっとキスする。

『っん、んんー、んっ、ぐっ、んぐっ、んううううう（ごくん）』

『ぶっはあ』

『はあはあ、なにをするんですか』

『加護と魔力をあげたのさ』

『う』

『さて、いい加減初めさせてもらおうか』

『律儀だね。ついでに名乗らない？』

『ふむ、良かる神殺しよ、我が名はルシファーだ』

『これまた大物がでたね。ロシアは逃げといてね』

『はい』

『さあ、始めるぞ』

『いくよ！ルシアをあんなにした責任とってもらう』

超音速で斬りかかる！一秒間に数十回斬りかかるがごとく防がれる。

『この程度か神殺しよ！』

『くそ、スターダスト！』

『下らん、ダークネストルネード』

『っがぁ！』

『ダークネスサイズ！はっ！』

『っち金色の壁』

『っち黄金か』

『喰らえ！極星招来！』

『ブラックホール！』くそ、ブラックホールに隕石が飲まれたか！

『デイベインコロナ・ザ・ソード』

8000度の剣を複数ですこれで・・・

『無駄だ、ブラックホール』

『それは、もう見た！ビックバン！』

ブラックホールとビックバンが打ち消し合う。

『ふん、やるではないか。ならばこちらもいくぞ、来い黒晶剣』

『っ』

『そらそら』

『くそ、速さは勝ってるけど・・・パワー、テクニックでまける』

それから25分打ち合いあう。

くそ、黄金使わないと防げないとは・・・

『そこだ！』

『がぁぁ！』

くそ、どうすればいい

『紅蓮争覇刃！』

『ぐは』

吹き飛ばされていく。

『きゃっ』

『ルシア・・・』

『大丈夫？』

『くそダメだ、こっちの攻撃当たらない』

『私も協力さして、あいつをゆるさない・・・』

『なにができる？』

『できることは・・・』

『なら、これでいこう』

『行けますか？』

『やってみせますよ』

『うまくいったらご褒美ちょうだいね』

『うまくいけばかまいません』

『やる気できたね』

『では、作戦行動開始します。行けますか？シュテル』

『“Yes, Master”』

『んじゃ、二人とも気をつけてね。ではさらば』

見つけた。ここからは魔法合戦だ。

『『『『『黄昏よりも暗き存在、血の流れより紅き存在、時の流れに埋もれし偉大なる汝の名において、我今ここに闇に誓わん、我等の前に立ち塞がりし全ての愚かなるものに我と汝の力もて、等しく滅びを与えんことを』』』』』』

『なに！効かないのが解らぬ愚か者とはな』

『20倍！竜破斬八連撃！』

『ぐ、そこまで魔力を使うか！ならばブラックホール・イン・リミテッド20倍』

その後、1時間全力の魔法合戦を続行した。

『ふん、限界か無駄なことおしたな。』

『くそ、まだだ、いくぞダインスレイウ……!!』

『来るがいい引導を渡してやる!』

突っ込む、もうこれしか無いか痛いんだよな。

『がはぁ!』

『これで終わりだな』

『お前がな!』

ダインスレイウをルシファーに突き刺し呪術を発動させる。

『この程度では死なんぞ』

『だろうね。だから切り札は別だよ』

『なにが……む、あれは……』

ルシアSide

上空の足場に巨大な魔法陣を展開しこの空域大量にばらまかれた神力と魔力を集め、神力は魔力に変換し全てをただ一撃に収束させる。この空域には大神クラス二柱の力をひとつに纏める。弱った状態なら十分いける。眼下ではノアが剣を突き刺されつつも相手に突き刺し呪術を発動させた。

『いきます。必ず生き残ってください。シュテル!』

『“Yes, Master”』

『“集え、赤星! ルシフェリオンブレイカー!!”』

ルシアSideEnd

『馬鹿な！貴様も死ぬぞ！離せ！』

『離さないよ』

『人間ごときにこのルシファーがやられるというのか！』

『貴方の負けた理由は人間を侮ったからですよ』

『覚えておれ我はかならず・・・』

空一面が真っ赤に染まり、破壊の嵐が巻き起こる。

『グアアアアアア！』

『はむはむ』

ルシアSide

『勝った。ノア・・・ノアはやっぱり・・・約束したのに・・・あれ、雨？まさか、泣いてるの・・・私にも悲しいという感情があったのか・・・』

『なんで泣いてるの？』

『それは・・・え、生きて』

『約束したじゃない。ほら、涙ふいて』

『はいっ』

『ようこそ、神殺しの世界へ』

『え』

『君はルシファーを倒したんだよ』

『でも、それは・・・』

『関係ないよ、私は最後の一撃で動きを封じたただけだしね』
『そうですか、しかし、私の身体は・・・』

『神力でいけるよ』

『・・・わかりました。約束のご褒美を差し上げます』

『ん？なにくれるの？』

顔が熱くなり身体全体が暖かくるこんな感じ初めて。

『わっ・・・わたっ・・・私です。私のマスターになってください』

『わかった・・・』

第11話「交易都市オルニオン」生きる為に後編」（後書き）

5..55までかかった。

15禁だどこまで書いていいのだろうか、15と18の差どうしよ。

そして、なぜかクライマックスなくなった街一個目なのに！これからどうしよ。

第12話「新たな旅立ち」

『ありがとうございます』

『でも、いいの?』

『はい、貴方がいいのです』

ここまででいってくれるなら嬉しいけど、どういうことだろ?

『一つ聞いていい?』

『はい、なんですか?』

『んと、マスターって意味から聞いてなんとなく分かるけど、どういうこと?』

『はい、私は死の直前に別世界から召喚されました。この世界で私は使い魔にカテゴライズされます。使い魔ですからマスターに魔力をいただかないと肉体を維持することができないのです、今までは自身の魔力と生命力で誤魔化していましたが限界がきてしまったのです・・・』

『そうなんだ、じゃあ私がマスターになれば解決されるんだね。』

『はい』

なんだかフェ〇トみたいだね。

『そして、元の世界では死んでるため帰れないか』

『そうですね。この世界に私を呼んでくれたおじいちゃんとおばあちゃんに生きるよう約束しましたから、戻ることはしませんでした。限界が見えて来たので最後に子供達のために彼らを排除しようとしたんですが・・・』

『返り討ちにあったと』

『うう・・・』

『よしよし、じゃ契約しようか』

『はい、お願いします』

『・・・「?」使い魔の契約ってどうするの?』

『主従契約と同じで血は同じなのですが、普通の契約と違い主の肉

体としても操れることや身体能力や魔力にブーストがつきます。しかし、肉体の一部が必要です。』

『肉体の一部？なんでもいいのかな？』

『たぶんいいと思います』

『なににするかな・・・』

『髪の毛も肉体の一部ですが』

『それは嫌だな・・・よし、決めた』

『なにをいただけるんですか？』

なにか決心したみたいですけど・・・

ルシアSide End

よし、覚悟決まった。なら実行するのみ・・・3・2・1・

0！

0と同時に魔法を使い右腕を切断する。

『えっ？』

ぐっ、やっぱり痛い・・・けど、さっきお腹貫かれたよりまし！

左手で右腕を持ち即座に模倣を開始し、まったく同じ右腕を模倣し右腕のあったところに模倣した腕を傷口につける。元の右腕はルシアにうけわたしてから。

『なにをしてるんですか！！』

気にしてる暇は無い、即座に回復魔法を使用する。

『プライマリイヒーリング、癒しの風、祝福の光！！』

魔法が発動したおかげで大分痛みが和らいできたや。

『いったいなに考えているんですか？右腕を切り落とすなんて』

『だって、髪の毛だとなんだかルシアの価値がそれだけみたいでい

やだったし・・・やっぱりだめ?』

無表情で怒られるのは怖いな。

『あたりまえです・・・嬉しいですが・・・』

あ、てれてる。今のうちに誤魔化そう。

『それよりこれで契約できるよね』

『たしかに・・・分かりました』

どうするんだろ、胸に抱いて・・・あ、今ルシアすごい格好じゃないか・・・どうしょ・・・あれ、腕が光になってルシアの中に入ったな。

『あとは、血を・・・』

『血だね』

『え?』

唇を切り、ルシアに口付けする。

『っん!んん・・・んく・・・(ぐく)』

『ゝ♪』

『んん・・・ぷはあ、まっ・・・ん・・・もういつ・・・あ・・・はあはあ』

『ご馳走様♪』

『はあはあ』

身体の花びらけたみたいだね。なでなでするとくすぐったそうにしてるけど嫌がってはいないか。

『大丈夫?』

『大丈夫じゃ、っ』

『ちょっと、大丈夫!』

いきなりルシアの身体がビクビクと痙攣しだした。

『あああああああ!!!』

『おい!』

『・・・・・・』

『生きてはいるけど・・・ああ、もうわかんないし!』

どうする?宿に戻ってサクラに聞くしかないか、痙攣は治まらない

し・・・

『すぐ宿に連れて行くからね』
ルシアの杖っぽいものを持ちながらルシアを抱き上げ、夜明けの空を飛行し宿へと急ぎ帰った。

『サクラ!』

『んっお兄ちゃん?』

『ルシアの様子がおかしいんだ』

『とりあえず落ち着いてね、ベッドに寝かせてあげて』

『わかった』

大丈夫かな?

『んっ!・・・どうしたの?』

『ごめんね、ベッド使うね』

『・・・わかった・・・』

ヨミはベッドから出てこっちにくる。

『・・・おはよう・・・』

『うん、おはよう。起こしてごめんね』

『・・・別にいい・・・』

ソファーに座るとヨミが私の膝の上に座って身をあずけてきた。どうやら、気をつかわせてしまったのかな。

『ヨミ、ありがとう』

『・・・(すりすり)』

甘えてるだけ? まあ、いいやヨミを撫でて待つてるかな。

『よしよし、いい子だね』

頭だけじゃなく、顎や耳を撫でてやると気持ちよさそうにしている。完全に猫だな。

『~~~~~♪』

しばらくヨミで遊んでいるとサクラの診察が終わったみたい。

『どうだった?』

『うん、身体が作り変わってる状態みたい』

『えっ』

『なにがあつたの？この子身体中傷だらけだし……』

『えっとね……』

説明をするとサクラの機嫌がどんどん悪くなってきた……ヨミも膝から降りて、怒ってるようだ。

『なんで、そんな危ないこと一人でしようとするんですか！』

『……（こくこく）』

『いや、一人でも平気そうだったし……それに、あんなのがいるなんて思わなかったから……それで……』

『それだけじゃないです、腕を切り落とすなんて……』

『私の力なら平気だし、死なないしね』

『そういう問題じゃないですよ！心配してたんですから！目を覚ましたらヨミしかいないし……』

『ごめん、巻き込みたくなかったからね。これは、私が自分からやったことだし』

『巻き込んでくれていいのに……』

『わかった。次から気をつけるから……今はそれより、ルシアのことだよ』

『それは、大丈夫です。話を聞く限り神力に肉体が適用しようとしていること、使い魔の契約を同時に行ったせいだと思います。』

『それってかなりあぶないんじゃない？』

『普通はそうですけど、もともと適正があつたうえに、お兄ちゃんと契約したことでキャパシティが増えてますから普通だったら平気なんです……お兄ちゃんの腕が入ったせいで一気に二人の神力がはいったためにこんな事になってるようですね』

『つまり、私のせい？』

『そうです』

『ごめんなさい……どうすればいい？』

『手を握っていてあげてください。お兄ちゃんと物理的にも繋がってると楽になるはずですよ』

『わかった』

『私は、部屋の更新とギルドで仕事請けて来ますね。もうお金ありませんから』

『ごめん、お願い。ヨミも一緒にいつてきて』

『……（こく）』

『では、お兄ちゃんご飯は頼んでおきますね』

『いつてらっしゃい。なにかあれば連絡ちょうだい』

『はい、くれぐれも安静にしててね。お兄ちゃん自身ですよ。いこヨミ』

『……（こく）』

二人がでていくと部屋には静寂が訪れた。手を握っていると苦しみはすくないみたいだ、それでも時たま痙攣してるけど……この……まま……

ルシアSide

『ん……』

目を開けたら見知らぬ天井が見えた。

ここは……どうやら、ベッドに寝かされているようです……

ふと、右手に温もりを感じて右側を見るとマスターが私の手を握って眠っていた。窓からは月光が差し込んでいた。

『もう、夜なんですな……っ！』

身体中から痛みが響いてきた。どうやら、腕と足の怪我はほとんど治っているみたいですね……後は、体中に残った蝋燭

と触手の跡ですか。

『シュテル無事ですか？』

『“損害状況89%自己修復機能に障害有り、スーリープモードに入ります”』

『それは、まずいですね。どこかで材料を手に入れて修理しないと・
・・・・』

『ん・・・・』

『おはようございます。マスター』

『ルシアもう平気なの？』

心配をかけてしまったようですね。

『はい、大丈夫です。動けそうにありませんが・・・・・』
『むしろ、動かなくていいよ。欲しいものはある？なんでもいって
ね』

『いえ、そこまでしていただかなくても・・・・・』

『ダメだよ』

『マスターを働かせて私だけ寝ているわけには・・・・・』

『なら、命令だ大人しくしていなさい』

『はい・・・・・』

命令されたらしかたありませんね。

『お水をください』

『うん、まってて』

『はい』

お水を汲みにマスターが部屋を出て行った。今の間に自分の身体を
調べてみる。

『・・・・・魔力の増大を確認。別の力・・・・・
神力の存在を確認、どちらも膨大な量ですね。これが神殺しになる
ということですか・・・・・人の身にあまる力ですね・・・
・・・私はマテリアルでしたが。どちらにしろ現在は休息をとる
べきですね。神ごとに特有の権能が存在すると聞いたのですがどん
な物でしょう・・・・・』

『ただいま、水もって来たよ』

『ありがとうございます』

痛みをこらえ身体を起こします。

『ありがとうございます』

私は自分が裸であることを気づいていませんでした。

『なっなんで裸なんです!』

慌てて布団を胸元に引き寄せ身体を隠します。すごく恥ずかしいです。

『服ぼろぼろだったじゃないか、あと身体拭いたりしたからね』

『マスターが?』

『うん』

『まあ、女同士なら……』

『私、男だよ』

『嘘ですよね……?』

『ほんとだよ』

『そんなに綺麗なのに………みたんですか?』

『うん、隅々までね』

『うう／＼／＼』

見られたと思うとすごく恥ずかしいです。前はこんな感情なかったのに。

『はい、お水』

『ありがとうございます』

お水をうけとりゆっくりと飲む。

『さてと、魔力と神力も安定してきたね?』

『はい、もう大丈夫です。ご心配をおかけしました』

『いやいや、気にしなくていいよ………それで、ルシア

は私の使い魔になったんだよね?』

『はい、間違いなく。私の中に確かにマスターを感じます』

『なら、さっそくやりたいことがあるんだけどいいかな?』

『はい、なんでしょう?』

すごく、嫌な予感がしますがマスターの頼みなら受けなくてはいけません。

ルシア Side End

『はい、なんででしょうか?』

私は今現在危ない状態にある。先の戦いで限界以上に魔力と神力を放出してしまった……そう、安定もしていない身体で。現在、私の身体は無茶な融合のせいで魔力神力共に自動では回復しない。使ったらそのまま無くなるのだ。そして、自分で作れないなら他者から回収するしか方法はない。今までは、元の総量がたかかったのと倒してきた敵から吸い取っていたが、今回使った量は半端ないため身体が補給をもとめている。いつてしまえば飢餓状態なのだ……そして、目の前には美味しそうな獲物がいる。無理矢理はしたくないし、聞いてみる。

『ルシアを……ちょうだい』

『えっ………／／／／』

『ルシアをちょうだい』

『分かりました／／／』

少し考えたみたいだけど許可が出た。

『じゃあ、布団どけるよ』

『どっどけるんですか?』

『うん、全部みせて』

『いや………です』

『なんで?』

『だって私の身体傷だらけでよごれて……ます………そんな

な身体をマスターにみせるだなんて……」

『だめ、見せてその治療だってするんだから』

『す……すてないでくれますか？』

布団の裾で口元を隠し涙目で聞いてくるルシア。

『ああもう、かわいいなルシア』

『きゃっ』

ルシアに抱きつきキスをする。

『っん』

『んん』

『捨てないよ、何があってもね。むしろ、ルシアこそ私からは逃げられないよ？』

『はい……逃げません』

『世界中が敵になっても逃がさないからね』

『はい、私も世界が敵になっても貴方のそばにいます』

『これから、よろしくね。ルシア』

『はい、こちらこそ。マスター』

ベッドの上にルシアを横たえさせ、その上に乗る。ルシアの身体には無数の鞭の跡や蠟燭でできたであろう火傷の跡があった。

『やっぱり、汚いですよね……』

やっぱり気にしてるよね……

『そんなことないよ。綺麗だよ？この傷跡もルシアに付いてるなら魅力になるよ。』

『／／／』

『それに、いまから全部綺麗に消毒するからね……ルシアの全ては私のものだから』

『はい、お願いします／／』

手で顔を隠したルシアをじっくりと観察して行動にうつす。

『まずは、首からいこうか』

『っ』

強張るルシアの首筋にある傷跡を執拗に舐める。

『っひゃ！なにを……』

『なにつて……ん……治療だよ（ぺろ）』

『……あ……なめな……くても……』

『それが……ちゅ……だめなんだよね』

『……あっ……う……なんです……』

『これ、呪いになってるからね。こっちは神の身体……存在そのものが呪いに対抗できる存在だしね。聖水かけるのもなんだか嫌だし』

『それでも……』

『あと、私にも目的があるしね』

『なんですか？』

『ルシアから神力と魔力をもらうって言う目的があるの』

『え？』

『私の身体安定してなくて、自分で生成できないので他人に貰うしかないんだよ。いままでは、他の二人からも少しもらってたけどね。今は、ルシアがいいの。それに、今回使いすぎたせいで飢餓衝動が抑えられなくなってるから……覚悟してね』

『わかりました。元よりこの身はマスターのものです。どうぞご自由になさってください／＼／＼／＼』

『ありがとう。いくよ！』

『はい／＼／＼』

ルシアの身体を舌でどんどん傷跡を舐めて治療していく。

『……ちゅ……ちゅっ……』

『……はっ……あっ……』

『ルシアの身体美味しいね』

『あう……そんな……こと……ないです……／＼／＼／＼』

『ふふふ、ぺろぺろ、ちゅっ』

『は……ひい……あっ……んああっ』

ビクビク痙攣しだしたな……イッタのかな？

『はぁ、はぁ』

艶っぽい息遣いして・・・もつと苛めたくなるな

『・・・ペロ・・・ペチヨ・・・ペちよ・・・くり』

『・・・あつ・・・あん・・・はっ・・・はひっ・・・
もまないで・・・』

『だゝめ』

『ああああ』

『2回目♪まだまだあるからがんばってね』

『そんな・・・ふ・・・あ』

『きゅっ、きゅっ、チュウウ・・・』

『あ・・・や・・・やだあ・・・やああつ・・・
それから、40分間ルシアの体中を舐めおえた。』

『・・・はあ・・・はあはあ・・・』

『ルシア、身体中私の唾液だらけだね』

『・・・はあ・・・もう・・・ゆるして・・・』

『だめだよ？まだ私は満足してない・・・もつと、神力と魔力
をちょうだい・・・』

『そんな・・・』

『だめ？』

『・・・好きにしてください／＼／＼』

『好きだよルシア』

『んっ！』

『声だけで痙攣するなんてかわいいな』

『・・・いま・・・びんかん・・・に・・・』

『ふふふ、もっと楽しもうね』

『うう・・・や・・・やさしくしてください』

さらに、二時間後たちようやく満足した。

『よかったよ、ルシア♪(なでなで』

『ふあああああああ(びくん、びくん』

『あらら、さっきから痙攣しっぱなしだね』

『らめえ、もうゆるちてえ』

『うん、じゃあ今日はここまでだね．．．．』

『はあはあ．．．．ほんとよ？』

『うん、だから．．．．身体をふかないとね♪』

『や．．やめ．．．．て．．．．もっ、いき．．．．た．．．．く
な．．．．い．．．．』

『だゝめ、綺麗にしなきゃ』

『あああああああああ！！！！』

容赦なくルシアの身体を隅々まで拭き終わった。

『ふう、おわっ．．．．あら、気絶してるや。おやすみ（ちゅ』

『ひゃああああ』

気絶しても反応あるんだ、抱きしめたらまたいったみたいだね。
ルシアの甘いにおいがしていい感じで寝れ．．．．そう．．．．．
ZZZZ。

サクラSide

『終わったみたいですわね』

『．．．．うん．．．．．すごかった．．．．．』

『そうだね。わたしたちもああなるのかな？』

『．．．．．いや？』

『いやじゃないですけど．．．．．』

『．．．．．わたしも．．．．．』

『とりあえず飢餓状態にならせないようにしましょう．．．．．』

『．．．．．うん．．．．．みが．．．．．もたない．．．．．』

『そうだね、気をつけよう。もうちょっと時間つぶしてからもどろ
つか』

『・・・・・・・・おふろ』

『じゃ、あらいつこしようね』

『・・・・・・・・（こく）』

一時間おふろでゆったりと疲れを癒し部屋に戻ったが・・・・・・・・問題があった。

『・・・・・・・・においが・・・・・・・・すごい・・・・・・・・』

『換気して寝ましようか・・・・・・・・』

『・・・・・・・・うん・・・・・・・・』

『一緒に寝ましょ』

『・・・・・・・・だきまくら？』

『だめ？』

『・・・・・・・・べつに・・・・・・・・いい・・・・・・・・』

ベッドに入るとお兄ちゃんのいい匂いとルシアちゃんの匂いにする。

『・・・・・・・・むう・・・・・・・・』

『どうしたの？』

『・・・・・・・・知らないひと・・・・・・・・におい・・・・・・・・ねれな
い・・・・・・・・』

『もう、これならどう？』

『・・・・・・・・（こく）』

ぎゅっと身体を包む用に抱きしめてあげると納得したようでした。

『お休みなさい』

『・・・・・・・・おやすみ・・・・・・・・』

新しい仲間が入ってこれからどうなるのでしょうか・・・・・・・・
そろそろ、違う街にいつてみたいなゝ

サクラSideEnd

???? Side

どこかの城の中……数人の人影が見える。

『急によびだしやがってなんのようだ』

『さあ？急に呼び出すようだろくでもないことだろう』

『わしはいそがしいんじゃないがの』

『黙れ、触れるなエロ爺』

『まったくひどいものじゃな若い連中わ』

『爺がわるいだろさっきのわな』

『老い先短い爺の唯一の楽しみをとるとわ』

『老い先短いっていうがまだ数千年は生きるだろうが』

『6千年前も同じ事言ってたが？』

そんな会話をしていると独りでにドアが引らき小さな50cmくらいの人影がはいってくる。

『わるいですね。わざわざお呼びして』

悪いと思った風もなく謝罪を口にする。

『まったくだ』

『尻さわら「嫌です」けちじゃな』

『早く用件言いやがれ』

『では、ルシファーが殺されました』

『『……』』

『冗談だろ？』

『残念ながら本当です』

『つまり、あのルシファーを狩れる存在が現れたということか？』

『どの神かの？』

『どうやら、人間に殺されたようですね。現場から神殺しが誕生する現象と同じ反応を感じしました』

『信じらんねえな、神ならともかく人間ごときにあのルシファーがやられるなんてよ』

『どうせ、遊びすぎてやられたんだろうて』

『貴様らは人間どもを過小評価しすぎなのだろう』

『しかしな』

『考えても見ろ、現に神殺しは実在しているのだからな。そして、大神でもあるルシファーがやられたのだ……』

『っち、その通りか』

『そうかの？いくらなんでもルシファーがやられるのはちとおかし過ぎぬか？』

『なにがだよ、げんにやられたんだろ？』

『そうですね、確かに変です』

『ん？そういうことか』

『なにがだよ』

『ルシファーの神力、魔力、身体能力や剣技などの技術力に修復能力を計算するとの、いくら油断したとて殺されるのはちとおかしいのじゃよ』

『？』

『ルシファーを殺すためには膨大な破壊の力がいるのじゃぞ？それも一撃で決着がつくようなしろもののがの』

『一撃？』

『いくら奴とて手傷を負わされれば油断せず相手を殺すであろう。それができなかったということわだ』

『彼を一撃で殺せるだけの威力をだせる人間が無名でいると思いませんか？神ですらほぼ居ないと言うのに。まず、不可能でしょう』

『つまり、ルシファーを殺した奴は少なくとも二人いたということか……それも、ルシファーの攻撃を耐えられる奴が……』

『ですね。どんな方法にせよ脅威になりそうですね。ルシファーの力を手に入れた存在がどのようなものであっても』

『だな』

『ひきつづき調査を頼むかの』

『わかりました』

『じゃあ、俺は帰るぞ。あばよ』

『わしも、おいとまするかの』

お爺さんと男は部屋から消えていった。

『さて、私も……』

『まて』

『なんですか？』

『ルシファーが殺された場所はどこだ？』

『フォドラ大陸の南部ですね』

『そうか……わかった』

『では、失礼します』

小さな人影も姿を消し一人の女性がのこった。

『フォドラ大陸……たしか、フレイヤの娘がいたな……』

……いや、しかし奴程度ではルシファーに狩られるだけだ……』

……フレイヤなら話は別だろうがな。逆にフレイヤが生きていてル

シファーを殺すなら人間などを使わないだろうし……』

調査結果しだいだな。どちらにしろ、我が敵となるならば撃ち滅ぼ

すのみ』

????? Side End

『んつまぶしい』

朝起きると見慣れてきた天井がめにはいった。

『……すう……』

『……むにゃむにゃ……』

『……ZZZZ』

いつの間にか、帰ってきたサクラ達とルシアの寝顔をみる。

『あつ確認しなきゃ』

抱いているルシアの身体に触り問題が無いか確かめていると。

『・・・・・・・・ん・・・・っ・・・・・・・・なっなにをしてるんですか？朝から・

・・・・・・・・／／／』

ルシアが目を覚ました。さすがに身体をなでてたら起きるか。

『身体が大丈夫か確認してただけだよ』

『そうですか、大丈夫です／／／』

『ならよかった』

『それより、マスターの方は大丈夫なのですか？お腹に剣を突き刺されたりしていましたし、私の全力全開をくらっていましたか？・・・』

『ああ、平気だよ、食らう前に黄金の林檎たべて不死になったのとルシファアの修復能力を模倣で手に入れて使ってたし、駄目押しに自分の身体を黄金でつつみ耐えれたよ。黄金は不死を意味するから丈夫な盾だったよ。貫通してきて死ぬほど痛かったけどね』

『ごっごめんさい』

『あやまらなくていいよ。私が未熟すぎたんだよ』

『そんなことは・・・・・・・・』

『二人ともおはようございます』

サクラがおきてきたようだ。

『おはようございます』

『おはよう』

『・・・・・・・・おは・・・・よ・・・・』

ヨミはまだ眠そうだね。目元こすってる、招き猫みたいに。

『これから一緒になるルシアだよ』

『マスターの使い魔になりましたルシアと申します。よろしく願いします』

『お兄ちゃんの妹をしてるサクラです。よろしく願います』

『・・・・・・・・ごしゅじん・・・・さまの・・・・どれいの・・・・・よみ』

こうして、聞くとすごいな。

『んゝその呼称どうにかできない？』

『マスターはマスターです』

『ごしゅじんさまはいや？』

『ぐっ、人前では名前で呼んでね』

『わかりました』

『・・・（こくこく）』

『さえ、朝食でも食べに行こうか』

『『はい』』

『・・・（こく）』

宿にあるレストランで朝食をとる。忘れてるかもしれないけど高級宿に泊まってますよ。

『今日の朝食はどうしようか・・・あれ、皆食べなくてもいいのかな？ルシアもいらないよね？』

『はい、必要はありませんね。嗜好の問題です』

『なら、食べな「だめです」く・・・』

『私も食事は嫌いではないです』

『ですよね』

『・・・たべたい』

『んじゃ、食べましょうか』

丸テーブルに4人で座りウェイターからメニューを貰う。

『そういえばいくらあるの？』

『宿代抜けば残り金貨8枚ですね』

『んじゃ一人銀貨50枚ね』

『はい』

『分かりました』

『・・・（こく）』

おのおのが好みの品を頼んだ。

私はパンとスープ、カルパッチョ。

サクラはシーザーサラダ。

ルシアはオムレツ。

ヨミは・・・食べ放題の朝食バイキングを選んでいた。

『いっという。気をつけてね』

『・・・（こく）』

嬉しそうに駆けていった。

『これからどうしようか』

『あの・・・』

『なに？ルシア』

『私のデバイスを治したいのです』

『デバイス？』

『このことです』

ひび割れたペンダントを見せてくれた。

『ひび割れてるね』

『これは私の武器でありパートナーなのです』

『あの杖がそうなんだ』

『はい』

『直すのに技術いるよね？』

『私の今の技術では無理ですね・・・（しゅん）』

『あの・・・なら、錬金術と魔動機の国ウエリンにある首都ブロッケンにいつてみたらどうですか？』

『そんなのあるんだ』

『聞いたことはあります』

『なら、いつてみようか』

『はい、船と馬車で七日くらいですね』

『じゃあ、準備して明日出発しよう』

『『はい』』

『・・・ただいま』

両手に抱えた大きな皿には山のように食べ物に乗っていた。

『いつもどうりだね』

『ですね』

『こんなに食べるんですか？』

『・・・ぱくぱく・・・もぐもぐ（こく）』

『あと2，3回はお替り行くね』

『はい』

『・・・ぱくぱう・・・んぐ・・・ぱくぱく・・・もふもぐ・・・』

』

『すごい速度でへってくよね』

『さて、私たちも食べよう』

『『はい』』

食事を終え各自準備をしてから、空いた時間を利用しギルドの仕事を数件こなし、ルシアとフラウにあいにいった。

『やふお』

『あ、あんたたち。ルシアと一緒にんだ』

『はい、一緒に行くことにしました』

『そうだ、あいつらのアジトが壊滅してたんだけどなにかしらないか？』

『『知らないよ／知りません』』

『絶対何か知ってるよね』

『知らないって』

『アジトが壊滅したならもう問題ありませんね』

『他の問題もあるけど・・・食料とかがやっぱりね』

『ふむ、ならトレジャーハンティングに行こうか』

『何を馬鹿なそんな危険なところ・・・』

『危険は無いよ。ひよっとしたらお宝ねむってるかもね』

『ああ、なるほど』

『え？え？』

『人手あつめて』

『子供でもいけますね』

『わかったけど・・・何かあったらよろしくね』

『『はい』』

スラムにすむ30人くらいがあつまった。

『嬢ちゃんたちが仕事くれるって?』

『まあ、そうだね』

『では、いきましようか』

歩き始めると慌てて追っていく人たち

『こっちつてまさか』

『はい、到着』

そこは、アジトの跡地だった。地面には巨大なクレーターができていた。

『おい、こんなところ危険じゃないか』

『危険ある?』

『半径200m県内ありませんね』

『だってさ』

『でも……』

『なにかあってもこのギルドBランクのルシアが守ってくれるよ』

『がんばります』

『わかったけどなにをするの?』

『どこだろう』

『『おい!』』

『こっちです』

『ほらほらいくよ』

『あ、まって』

『くそ』

『楽しみだね』

ルシアの後を追うと水路にでた。

『ここだなにするんだ?』

『こうするのです。BurasutoShoot!』

爆音が響き水路の入り口を破壊する。

『ここをいきます』

『船なんて無いよ?』

『船が無ければ水の上歩けばいいじゃないか』

『無理だよ』

『平気へいき』

『無茶な』

『えい、ロックブラスト、エリアルエッジ』

川の端を魔法で作り出した岩をつかい道をつくり風の刃でここを無くす。切り落とした岩もこだかくだき隙間を埋めるのに役に立つ。

『最後にフレイムストライク』

岩をとかし接合させる。

『はい、道の完成』

『でたらめなことですな』

『これくらい普通だよ?むしろ飛んだり水の中はいった方が早いし』

『ほらいくよ』

『ああ』

みんなでルシアが通った道をそのままいく。

『すこしまってください』

『OK』

『わかりました』

『わかった』

先に行ったルシアが死体を処理したようだ。

『子供たちはここで荷物を船に乗せるのを手伝ってあげて』

『『『『『は』い』』』』』

『他の人は奥へいきましよう』

奥へいくと倉庫につく

『ここは無事でしたか』

『みたいだね』

『この箱全部……』

『私たちは明日の早朝ここを出ます』

『次の目的地にむかうの』

『そっか、この借りはいつかならずかえすからね』

『気長に待ってるよ僕ら魔力が大きいから年なんてそんな取らないしね』

『いいなうま、祖先か私がかならずかえすよ』

『わかった、期待しないで待ってる』

『うん』

『またどこかで』

『また道が変わるときに』

『かならず』

『』『また会いましょう』『』

宿への帰り道、ルシアと共にあるいてゆく。

『また、死ねない理由ができたね？』

『そうですね。フラウ本人か子孫かは分かりませんが……か
ならず会いましょう』

『だね』

宿へ帰り、4人で仲良く一緒に寝て明日をむかえるのだった。

第12話「新たな旅立ち」(後書き)

次の街へいっちゃいます。

10日から更新できるかな？

テイルズやってそうな私がいます・・・
次は舞台がかわります。

第13話「ヨミと黒い大蛇」

私たちは、次の日の早朝ウェリン行きの船に乗った。
船旅は順調に進んでいた。

『ブロッケンについてからどうしますか？』

『ん〜と、ルシアの杖シュテルの修理？』

『それが終わったあとですね』

『修理の時間も結構かかると思います』

『そうなんだ・・・ねね、私たちも学ぶことできるの？』

『錬金術や魔動機についてですか？』

『そそ、こないだルシファーと戦ってわかったけど・・・
私は、弱すぎる』

『え？』

『魔力や神力は膨大な量有るし、身体能力もかなり高いね。でも、
それだけだよ。もってる力に技術が追いついてない・・・宝の持
ち腐れて奴だよ』

『むこうの世界の言葉ですか・・・なんとなくわかりますけど・・・』

『修行が大事ってことですね。しかし、ブロッケンではそういった
技術は手に入らないのでは？』

『だろーね。けど、魔具や魔動機などの技術は手に入る。それを覚
えて私たちが作ればどうなると思う？』

『???』

サクラはわからないみたいだね。ルシアは気づいたみたい。
『どういうこと？』

『簡単なことですよ。人族の魔力が軍人でも約1万です』

『で、私たちの魔力は？』

『それは、数百数千倍・・・あっ、わかりました』

『・・・こめられる・・・まりよくりますが・・・』

ちがう？』

『そうだよ、そして魔力より神力のほうが強力だ』

『魔具の技術を学び魔具では無く神具を作るということですね』

『うん、名前は決めてないけど……かなり強力な装備ができるね。このダーインスレイヴなどドヴェルグが作ったような物がね』

『それなら、神にも有効かもしれませんね』

『……きつと……きく……』

『あと、ルシアのシュテルみたいに魔具と魔動機を融合させて、神力をたたきこめば面白そうじゃない？』

『出力に耐えられるでしょうか？』

『不死性のある黄金に術式を刻めばどうにかならない？』

『わかりません』

『とりあえず、あちらで学ぶということだね』

『そういうことでおねがい』

『問題は私たち戸籍ありませんよ？』

『何か問題あるの？』

『あります。街に入ることはできますが学術機関など国が運営しているところは国籍が必要ですね』

『入手方法は？』

『ありますがどれも手続きに時間かかるでしょうね』

『私は国籍ありますよ』

『そうなの？』

『召喚者の娘として登録されてます』

『得た方法は？』

『賄賂でどうにかなるみたいです』

『汚い世の中だな』

『だね、お兄ちゃん』

『なら、お願いしていい？』

『マスターのお望みなら叶えたいのですが……問題が権力

者にあえるかどうかという問題が……』

『そうか……。まあ、屋敷にいつて繋いでもらえばいいんじゃないかな。ごねるようなら賄賂でもわたしてね』

『賄賂って犯罪ですよ？』

『贈り物は犯罪じゃないでしょ』

『……。へりくつ……。』

うわ、ヨミにつっこまれた。まあ、だめなんだろうけどね。

『ごめんなさい』

『ついてから考えようか』

『そうですね』

『じゃあ、訓練でもしようか』

『訓練ですか？』

『ルシアに魔術コントロール教えてもらいたくなって思ったんだ。たった1万の魔力であそこまでできたんだから実力はわかってるし』

『そうなんだ』

『私でよろしいればいいですが……。厳しいですよ？』

『なにかオーラがでてるのですが……。』

『どうするお兄ちゃん？』

『どうします、受けますか？やりますか？了承しますか？』

どうする？どうするよ私……。って、選択肢は3つどれもおなじじゃない？

『どれも同じ選択肢だね』

『……。』（こく）

『やらないのですか？』

『やるよ、がんばろう』

『……。がんばって……。』

『待てヨミ。お前も受けるんだ』

逃げようとしたヨミをしっかりと捕まえる。嫌な予感しかないんだもん！

『……。や……。』

『だめ』

『．．．．．（ふるふる）』

『じゃあ、三人お願いね』

無視してルシアにお願いする。心が痛むが愛の鞭だ。涙目になっていやがるヨミが可愛いからっていじめてるわけじゃないデスヨ？

『わかりました。がんばっていきましょう』

『『おう／はい／．．．．．』』

そして、地獄の特訓など生ぬるい特訓が始まったのだった。

特訓は昼から夜まで行われていた。

『はあ、はあ、もう．．．．．だめ．．．．．』

『．．．．．ゆるちて．．．．．』

『もう、まりよくありません．．．．．』

ほぼ休み無く大量の魔法弾を作り絶え間なく操るなんて拷問だよ．．

．．．．．

『魔力なんて補給してあげます』

『っひい』

少ない魔力を常に最大で放出され、吸収能力で与えられ続けたヨミはすっかりルシアを怖がるようになったね。

『おうよしよし』

とりあえずヨミを落ち着かせよう。

『．．．．．（ガタガタブルブル）』

『ほら、ルシア。もう、夕食の時間だからね？』

『今日はここまでですね』

『『え？』』

まさか．．．．．明日も？ヨミも震えまくってるよ．．．．．

『明日もやりますよ。後3日は船の上なんですから』

『『いやあああああ！！！！！』』

海上に三人の悲鳴が木霊した。

3日後の昼間、事件は起きた。訓練をしていると船に突然激しい揺れが襲った。

『どうしたんだろ？』

『聞いてみましょう』

私とルシアでブリッジに聞きに行くことにした。

ブリッジでの前に乗客が騒ぎを起こしていた。先ほどのゆれについて抗議みたい。

『なにがあったんだ！』

『どうか落ち着いてください！大丈夫ですから！』

『沈むんじゃないだろうな！』

『大丈夫です！』

しばらく眺めていると人がいなくなってきた、船員も中にひっこんだ。

『どうします？』

『こういうときの係員の言葉は当てにできないよ』

そう、たいがいのことでは不利になるようなことは言わないしね

『どうしますか？』

『こっそり聞いてみよう』

『はい』

扉に耳を当て中の音をきく。もちろん、聴力強化してね。雑音うるさいのは気合でがまんですよ？

ブリッジから会話が聞こえてくる。

『船長どうします？先ほどの揺れは……』

『うむ、このままいけばまずいな』

『くそ、この海域に移動してるとは運がねえっすね』

『このまま逃げられますか？』

『まず無理だろう』

危険な会話が結構聞こえてきますよ？沈むのは困ります。

『ん？船長……選択肢がなくなりやした』

『どうした？』

『前方に王族の紋章がついた魔動船を発見しました。どうやら攻撃を受けてた見たいですね』

『狙いはそっちか』

『くそ』

『どうやら、あの魔動船を追ってきたみたいだな』

『どうします？あの魔動船を囚にすれば……』

『それ以上うな。どっちにしろクラーケンから逃れられん。次の目標はこちらになるだろ』

クラーケン？魔物ですか……。で、狙われてる王族がいると……。これはつごういいね。

『ルシア、この世界のクラーケンって知ってる？』

『分かりませんが倒せ無くても追い払えると思います』

『根拠は？』

『マスターに私、サクラ、ヨミここまでの戦力がいるのですから』

『戦力は申し分ないけど……。戦場が海だと……』

『上空から火力で押し切ります』

『周りの船大変そうだな』

『だめですか？』

『いや、結界で船守ればいけるかな』

『分かりました、準備します』

『その前にやることがある』

私は、ブリッジのドアを開けると同時に声をかけた。一度やってみたかった。

『話しは聞かせてもらいました！』

『なっ！』

『こまります勝手に入られてわ！』

『お嬢さん方なにかいい解決法でもあるのかな?』

船長さんが疲れた顔して聞いてきた。苦勞してるんだねえ、ブリッジの中を見回し注目が集まったところで宣言する。

『解決方法は簡単ですよ。倒せばいい』

あ、なんだこいつって目をしてますね。いらつきます。

『はっ馬鹿なことをSランクに指定されているクラーケンを倒せるはずないだろ』

『寝言は寝てから言うんだな讓ちゃん』

ふふふ、ころしてあげようか? と思ったらロシアが動いていた。

『マスターに対する侮辱はゆるしません』

黒いオーラをだし一瞬で無数の魔法弾を作り出し攻撃しようとしていた。

『っひ』

『わ、すつつぷすつつぷ』

あわててとめます。ブリッジ壊れると大変だ。え? あいつらの命なんて知らないよ。

『マスターがそういうなら仕方ありません。命拾いましたね』

しぶしぶ魔法弾を消してくれた。次なんか変なこといたら殺しそ
うだね。怖い怖い。

『はっはい』

『さてと、具体的に言うとなら私たちがクラーケンを倒します』

『できるのかね? 相手はSランク軍隊がうごくような相手だが』

『倒せなくても追い払うことはできますね』

『しかし、乗客を危険にさらすわけにはいかん』

『王族を助けないわけには行きませんか?』

『くっ、そうだ』

『なら、選択肢はありません』

『わかったまかせよう。私たちがすることは?』

『私たちをあそこまで運んでください』

『了解した』

『では、私たちは準備してきますね』
『ああ』

サクラ達のところに行き説明する。

『クラークンですか・・・』

『・・・おいしい？』

『さあ？食べれるのかな？』

『・・・食べてみる』

イカやタコっぽいからいける気がするな

『作戦は簡単です。私とマスターで空から近づき攻撃します。サクラは船に結界をお願いします』

『んゝヨミも空飛べるよね？』

『・・・飛べる・・・』

『じゃあ、3人だね』

『・・・水嫌い』

『なら、吊り上げるか』

『どうするんですか？』

『クラークンの身体に楔を打ち込み空の上に引き上げる』

『無茶苦茶ですね。そこまで浮かせられるかどうか・・・』

『無理かな？』

『普通に倒したほうが早いですね』

『かな？』

『はい』

残念だけど仕方ない

『ま、がんばろう』

『私はシュテルが使えないので出力的に微細なコントロールは無理です』

『わかった』

準備していると船長がやって来た。

『目標場所に着いた』

『クラークンは？』

『襲撃を開始したようだ』

『分かりましたすぐいきます』

『頼む』

『じゃ、サクラはこの船とあっちの船もお願い』

『はい』

『船長さん船は前進つづけてね』

『わかった』

『いくよ』

『わかりました』

『……（こく）』

三人共、空を飛び襲われてる船へと向かった。

前方にクラークンを見つけ上空に移動した。

『じゃ、狩りをはじめましょうか』

『……（こく）』

『了解』

『まず私からいきますね。地獄の業火よ……』

ルシアが詠唱を開始した。私達も戦闘を開始する。

『ヨミ行くよ！』

『……うん』

船へ向かって急降下。どんどん船が迫ってくる！楽しい！

『ヨミはクラークンをお願いね。存分に暴れていいから』

『……（こくこく）』

ヨミに指示をだし、船に絡み付いてる触手を目標に定める。

『さあ、狩りの時間だよダーインスレイヴ！』

船に絡みついた触手を次々切断していく、空からはルシアの火炎魔法が飛んできて触手を焼いていく。これならなんとかなるかな？

ヨミSide

ごしゅじんさまにめいれいうけたとおりくらくけんにこうげきする。

『……えい』

いちげきでうのようにようごくのをはれつさせたけど、しろいねばつかいのがいっぱいかかってきてきもちわるい。

『つと、わ』

おそらからほのおがいっぱいおちてくる。るしあのこうげきだろうけどこつちをきにしてないし……くらくけんからいいにおいしてきた……

『きゃ』

むううのようによにつかまっちゃった……どうしよ、なにができるかな？あばれていいっていったから……あれ、だしちやおう。すぐおなかへるけどたべるのいっぱいあるから……いいよね……？

『でてきて……ニズ』

よんだしゅんかんわたしのかげからくろいおおきなへびがどんどんでてきてクラーケンをたべていく。

『……おいしい……もっと、ちょうだい？』

くろいへびとわたしのかんかくはつながっている。もっと、もっとだよ。もっとたべさせて……ふふふ。

ヨミSideEnd

ヨミが触手に捕まって、白っぽいねばねばを全身に受けてる姿が見えた。なんて触手ゲーム？

ん？助けようとした時、すごい神力がヨミの中から感じた。

『なんだ、いやな感じがするな』

見ていると、ヨミの影の中から黒い大蛇がでてきた。それはクラークンをどんどん食べていく。クラークンは断末魔をあげて海底に逃げていく。その後を大蛇が追っていく、影からでる大蛇は止まることをしらずにクラークンを追っていく。

『ヨミ！』

ヨミは嘲笑いながらクラークンをみつめている。

ヨミの身体を抱きしめ声をかけるが反応が無い。

『ヨミ！』

やはり返事が無い。ついに大蛇はクラークンを食べつくしこちらに向かってきた。これって暴走してる？

『っち、使いたくないけど・・・』

『っ！』

ヨミの唇を奪い主従の契約による停止命令をだす。神殺しの身体は普通外からの干渉はほぼ受けないから内部から送るしかない。

『んんんん！』

少ししてヨミの影からでていた大蛇は影にもどっていった。

『ぷふぁ、もう平気か？』

『・・・・・・・・・・（こく）』

『ならいいけど』

『・・・・・・・・・・ちがほしい』

『あとでね』

その後、ルシアと合流し船にもどった。ヨミを休めたいからね。

船室でヨミをベッドに連れて行き血を吸わせてあげたら思いっきり吸われちゃった。不死じゃなかったら死んじゃってるよ！

『・・・・・・・・ぷふぁ・・・・・・・・ごちゅしょうしゃま・・・・・・・・』

『それは・・・・・・・・よかった・・・・・・・・もう、だめ』

血が抜かれすぎて眠気が襲ってきたのでそのまま寝た。

『・・・・・・・・ねる・・・・・・・・』

ヨミと一緒に眠った。ついたら起こしてくれるとおもうし・・・・・・・・明日は、ようやく港につく・・・・・・・・よみのこともかんがえないと

・・・・・・・・ZZZZ

第14話「王都へ向け出発」

サクラに起こされ、目を覚ますと大変なことになっていた。

『お兄ちゃんすごい格好ですよ?』

『えっ?』

なんか身体中ぬるぬるするしイカ臭い臭いが……まさかと思隣を見ると白濁液を全身に浴びたヨミの裸があった。

『あっあのこれは……』

『昨日あれから何してたんですか?』

笑顔なのに怖いって思ったのは初めてだ。これが恐怖か。

『えと、サクラの思ってるようなことは無いよ? 本当だよ?』

『私が思うようなことって何ですか?』

くっ、どうにかして誤解かなければいけない。

『これは、あの後すぐに部屋で血液あげてただけだよ?』

『へえ』

サクラの目が白濁にいく。

『このぬるぬるはクラークンの奴だしね? 決して私がした訳では無いし……』

『くすくす、おろおろしすぎですよ?』

『あっ! 初めっから遊んでたね!』

してやられた恥ずかしいじゃないか!

『ほら、二人共身体洗いますよ』

『あっ私は自分で洗うからヨミを「ダメです」あら……わ
かりました! 好きにして!』

『はい、好きにしますよ♪』

しまった。早まったかも。

『さあ、洗いますよ』

『お手柔らかにお願いします』

サクラに身体中を洗われてから着替えて外に出ると、既に日は昇りお昼時のようですよ？

『こんなに寝てたのか』

『こんなにちは、お嬢さん』

後ろから声をかけられたので振り向くと船長がいた。

『こんにちは、すいません。あれから寝てしまいました』

『構わんよ、お嬢さん達のおかげで助かったからね』

『そうですか、では気にしません。そうだ、私達は技術を学ぶために国籍が欲しいのですがどうにかできませんか？』

駄目元で聞いてみましょう。

『ふむ、私でもどうにかできるが、もっという方法があるぞ』

『何ですか？船長さん』

『うむ、王族に頼むといい』

『いや、いきなり王族の知り合いとかいけませんよ』

いたら苦労しないし

『問題ないぞ、君達が助けた船に王族が乗っていたんだ。お礼がしたいそうだがどうする？』

これは……忘れてたけど都合いいね。

『じゃあ、お言葉に甘えさせて頂きましょう』

『案内をつける』

『いえ、必要ありません。私達だけで行動した方が早く着きますから』

『そうか、わかった。では、連絡だけいれておく』

『お願いしますね』

『名前を名乗って無かったな。わしはアーサー・アインシュタトじや』

『ノアと申します』

『船長！』

『どうやら時間のようじゃな。近いうちにまた会おう』

『会えたらよろしくお願いします』

『ではな』

さて、予定通りサクラ達が準備した馬車に乗って王都をめざしましょう。王族の方に会うのは初めてですが大丈夫ですよ？ たぶん・・・きつと・・・だといいな

こうして私達は王都ブロッケンへと旅だった。

第14話「王都へ向け出発」(後書き)

しまった。ヨミのこと書いてないや。ユミが倒した神の権能(神の力)たぶん今後書くと思います。

マイソロジー3オススメだよ！(あ

また、三日以内にはあげると思います。
では、お休みなさいませ。

第15話「王都到着〜養子になりました〜」

3日後、馬車に乗って王都ブロッケンに無事付いたようです。

『その馬車止まれ!』

ブロッケンの城門を守っている兵士に呼び止められたようだ。

『失礼ですがお名前をお聞きしてもいいですか?』

なんだろ? まあいいかな。

『ノアと申します』

『っ』

ん? なんだろ? 兵士の顔が変わったけど。

『王よりお城にお連れするように伺っております』

おや、王族たすけたためかな? まあ、うけようかな。

『はい、わかりました。案内お願いしますね』

『はっはい!』

兵士が緊張してるみたいだけど緊張してるのかな?

『お姉ちゃん私たちどうしますか?』

『うーん、街を適当に観光して』

『わかりました』

『了解』

『・・・・・・（こく）』

なにかあったら困るしね?

王城は、やっぱり西洋風のお城だった。ただ、魔動砲などが装備されているのだから、技術力は高いのかな? 城下町でもぽつと見た感じ○の錬金術師などででてきた機械義手などもあるようだしね。王城で武器を取り上げられ、魔力封印の腕輪をつけられ玉座の間へと案内されました。

玉座では王と王妃が威厳をただよわせ玉座に座っている……

『王の御前である控えろ』

側にいる側近扱いのがそんなこといつてくるが当然私の答えは決まっている。

『だが、断る!』

『なっ!』

『っ!!』

おやおや、周りから怒気や殺気が感じられますよ?

『無礼であるぞ!』

『知らないよ。やるならやってあげるけど?』

『なにを……』

『この言わせておけば!!』

ふう、すこし力だそうかな、この腕輪うつとうしいし。

『いっておくけど、この程度の枷意味無いよ?』

魔力を放出し封印の腕輪の許容値をこえさせて腕輪を破壊してやる。

『さて、やるならクラーケンより楽しませてね? (にっこり)』

おやおや、皆さん静かになりましたね。

『ええい、なにをやっている!早くそいつを跪かせろ!』

空気よめてない奴もいるみたいだけど殺してみるかな?

『よい』

『しかし!』

『よいといっている』

『っ、わかりました』

さすがに、王の命令なら従うか。

『まずは、息子を助けてくれた礼を言っておこう。感謝する』

『うん』

『お礼をしたいのだが、まず君達がこの国にやってきた理由を聞かうか』

さすが王様結構な威圧感がありますね。目的次第でこちらを見極め

ようとしてるのかな？

『錬金術と魔動機の技術を学びに来た』

『ほう』

『なんだと！』

まあ、他国のものに自国の技術を教えろっていつてるんだから驚くよね。

『学んでどうするのだ？』

『もちろん道具を作り出す。そのために、国籍がほしいんだけどね』

『ふむ、ならば我が国の貴族と婚姻するか、養子になるかだな』

『婚姻なんて論外』

絶対にごめんこうむるよね〜

『なら、養子だが……だれかいるかな？』

むう、周りの貴族は沈黙してるね。

『ならば、わしが引き取ろうかの』

おや、この声は船長さん？

『アーサーか』

『お久しぶりです』

『息災でなによりだ。して、引き取ると？』

『馬鹿な公爵家がどの馬の骨ともわからん者を迎え入れるというのか！！』

『む』

『問題なからう、この者は王子とわしの命を助けてくれた。何も問題なからう』

『しかし！』

『くどい』

『くっ』

『では、決まりだな』

『ん〜船長さんの養子になればいいんだね』

『そうじゃな』

『わかった、それでいいよ』

『では、それで良いな。』

こうして、私は国籍を得るためアーサーの養子になった。
その後、アインシュタット家で4人共お世話になり学院で学ばせて
もらっている。

第15話 「王都到着」養子になりました」 (後書き)

次はちょっと時が進ですよ

第16話「準備中」

養子になり一年が過ぎた。一年のうちに読み書きや基礎知識（公爵家となれば礼儀作法など）も覚えさせられた・・・男性と女性両方の。私はどっちにもなれるが、男は疲れる。女神の肉体の力が強いから男になると押さえ付けるために力がどんどん減っていくからサクラ達からいただいている。全く不便な肉体だよ。

そんな感じで、七ヶ月で覚ええましたよ。ふふふ、多種族の言語や錬金術や魔動機技術、魔法の基礎も覚えたから時間かかったよ。

残り五ヶ月を使いブロッケンの街を見学したり学園に入るための勉強をしていた。家庭教師を付けてくれたおかげで楽に合格できた。

さて学園について説明しよう。正式名は学園都市イクシード。ブロッケン郊外に存在する。その名の通り都市一つを研究、開発、育成のために使用しているらし、学生の育成目的は超越者・・・・・・。簡単にいうと勇者とか各分野の特別な存在を育成することが目的らしい。人族と竜族で出資しているそうです。まあ竜族との関係は奴隷のせいで微妙らしいけどね。そしてなんと地下には数百階層におけるランダムダンジョンがあるんだってさ。鳥でいく奴やアーク○ラット、魔界が主でもうすぐで予定の4とか真っ青？4は違うかもしれないけどね。できなかった事だけ心残りかもね（おい）。ふふふ攻略しちゃいますよ？あ、でも力はほぼ封印しますけどね。ホントに危ない時以外解放禁止ってルシアに言われたんだ残念。武器や道具関係は好きにするけどね。

人付き合い苦手な私はコミュニケーション取れるかな？私は技術科で、他三人は戦闘科にしたよ。ダンジョンは放課後しかいけないらしいね。

そんな感じだったんだけど御父様（船長）に暇だったので政務を教えてもらった。残り三ヶ月くらいになると王様の手伝いもできるようになり喜ばれた、休暇ができたってね。元の知識生かしただけ

なんだけどね。秘書にならないかと言われたけど丁重にお断りしました。かたつくるしいし、本来の目的もあるし・・・・政務たまに手伝ってあげよう。

瞬くまに時間は過ぎ、試験は無事合格しました。ちゃんと実力ですよ？裏で手を回してもいいって言われたけど断りましたよ。

今度は虐められないようにしなきゃ・・・・がんばろう。

第16話「準備中」(後書き)

短いです、ごめんなさい。

新章は学園です。ちゃんと書けるかわかんないですが、気にしない！
(あ

やっていたゲーム無事クリアしました。プレセアまじ可愛いです。
さて、4が後五日ですよ？みんな予約しましたか？暴走愛マニア堕
天使手に入りませんよ？気をつけてね。

出るまで頑張って更新する予定です。明日は用事あるねでね。

『……気を……つけて……前書き……』

はい、教えて頂きありがとうございます。気づいてませんでした
よ。

改めて、ありがとうございます。m(・・)m

『……ありが……とう……とう……(ぺこり)』

第17話「入学式」

入学式当日をむかえ、現在講堂にいる。

『うわ、すごい人だね』

『ですね』

『・・・・・・（こく）』

そう、講堂には千人近い人が階下に立っている。

『さすが、フォドラ一の学園ですね。20代の方もダンジョン目当てに入学してきているようですね』

『なるほどね。しかし私達は下に行かなくていいのかな？』

『私達はあるその席みたいですよ？お兄ちゃん』

そっちを見ると一見して豪華だと分かるVIP席だった。

『ホントにこの席？』

周りには貴族方の席がある。これはまだいい、しかしその一番上にガラス張りで魔法障壁ばりばりな隔離された場所が指定された席だったのだ。精鋭と分かる警備までいる。

『なんでこんな大袈裟な警備？』

『なんでだろうね？』

『マスターは公爵家の一員になったのです。王位継承権ある方に万が一何かあれば問題になりますので仕方ないと思います』

『めんどくさ』

『それでも手を回して代表挨拶無くしていただいたのですよ？』

『う、ありがとう』

『お気になさらず』

『あの・・・・早く行きませんか？周りの目が・・・・・・』

貴族共にじろじろ見られてるな～やな感じ。

『そうだね。行こうか』

『はい』

『ええ』

『・・・・・・・・（こく）』

『ん？』

前方から貴族の一団がやって来た、まっすぐこっちに向かって来る
ようだけど・・・・・・・・・・

『おい、邪魔だ退け！』

『きゃっ！』

こいつヨミを弾き飛ばしやがった。殺してやろうかな？

『なにするんですか！』

『邪魔だから奴隷を退けただけだろうが』

『『そうだ、そうだ！』』

ムカつきます・・・・・・・・

『避ければいいだけじゃないですか！』

『なぜ大貴族であるこの私が避けねばならんのだ、くだらん』

『なっ』

『いくぞ！』

『『はい』』

そのまま、去っていかうとしている。

『ふふふ』

『マスター大貴族と揉め事をこんなところで起こすのはまずいです』

『でも許せないよ？』

『・・・・・・・・わたし・・・・・・・・なら・・・・・・・・へいきだから・・・・

・・』

『ちっ、ならこの場は見逃しますが・・・・・・・・覚えてなさい・・

・・』

『はい、償いはさせましょう』

『うん』

『・・・・・・・・（こくこく）』

『もうすぐ時間です』

『行くよ』

次あったら覚悟するといひ・・・・・・・・ふふふ。

VIP席で入学式をぼくと見ている。校長の挨拶ってなんでこんな長いのだろうか？

『で、あるからして我が校は……』

『長いわ!』

『ぐはっ!!』

うわ、校長が17くらいの鎧を来た美少女の回転回し蹴りをくらいふっとんたまや。おもしろいなくしかし、ミニスカートで回し蹴りはどうだろうか？一瞬見えたよ？

『さて、失礼した。私は生徒会長のセレスティナ・ウェリンである』みんな啞然としてるね。ウェリンってことは王族があんなことしたわけだし当然かな。

『入学おめでとう。我々生徒一同は君達を歓迎する。さて、ダンジョンを目的として入学したものの達よ残念だったな。一ヶ月お預けだ』
『ええ〜』

『入学から一ヶ月の間にダンジョンの基礎知識を覚えてもらい、テストをクリアした者のみ入れるようになってる。これは、君達の安全の為の処置だと思って頂きたい。さて、技術科だが君達は学園側が用意したアイテムを使い一定以上の物品を作ることがテストだ。技術科が得る特典は自ら販売が可能な権利が貰えることなので励むといい。さて、最後に生徒会が企画したパーティーを今夜執り行うぜひ楽しんでくれ。以上だ』

『入学式はこれにて終了です。各学科ごとに指定された場所にいてください』

『じゃあ、ここでお別れかな』

『そうですね……』

『三人共気をつけてね』

『はい』

『……(こくこく)』

『お二人のことはお任せ下さい』

『じゃ、またあとでね』

『はい』

『お気をつけて』

『・・・また・・・あとで・・・』

私は技術科の指定された場所に向かった。

指定された場所には300人近い人が集まっていた。ここでクラス分けが発表されていて、各自クラスに行くよう指示がだされている。

『私はFクラスと』クラスはA～Fまであり、Aから順に優秀だからFは最低クラスになる。

Fクラスはお金のない人達や問題児が入れられるらしいよ？

私は自分で希望したからいいんだけどね。気兼ね無く過ごせるらしいし。

教室の中に入ると視線が集中してきた、なんでだろ？まあいいや、席につこう。適当に空いてる席につき教室を見渡すとちらちらこっちを見る人と思議なことが目に入る。教室自体はボロボロなのに机や椅子だけ一見すて高価だと分かる真新しい品でした。なぜこのお金で修理しないんだろ？疑問に思っていると時間間際に二人の美少女が入って来て私の隣のなぜか空いてた席に座った。どうやら双子みたい、そっくりだもん。片方はストレートロングでもう片方は、長い髪をツインテールにしていた。髪の毛の色は綺麗な青色に紫の瞳ってことは神族か神族の血を引いてるハーフみたいだね。（基本的に紫の瞳は神族にのみ現れる）

ちなみに私の格好は、黒い男子制服を着て、長い髪を後ろに纏めている。ちなみに、軍服みたいでカッコイイし防御方面も優秀。女子の制服は所々にフリルがあり、スカートはミニスカートだったよ。

可愛いです、はい。制服の色は自由に決められるのでお好み次第だ。

『僕はレナっていうんだよろしくね♪こっちは双子の妹のニナね』

『ニナ・クロスフォードです。よろしくです』

『他の技術科のクラスに半分の時間で勝てます？』

『くくく、いい質問だ。結論から言うとな勝てるぞ。ダンジョン内部を実際に体験すれば何が必要で不必要か自身の身を持って体験できるし、実際にダンジョンに潜ってる連中が上質な顧客になってくれる。いいか経験は十分武器になる。わかったな？』

『はい！つまり、ダンジョンに潜って信頼を得て顧客を手に入れられ、何が必要かも分かるから無駄も省けるんですね』

『そうだ。基本的にハズレを引く確率が低いし、連中から優先的に素材を貰える場合もある。これは馬鹿にならないぞ』

『』『』『それなら確かに勝てそうだ』『』『』

『あと、言っておくが売上の4割をいただくぞ。内訳は三割が授業料で残り一割が設備各教室の設備投資だ。三割の方は入学時の契約通りだな。一割はこのボロボロをどうにかしないといけない』

教室とか他もすごいしなうちなみに各クラスごとに校舎丸々一つ技術科には与えられている。

『さて、時間割だが午前9時から初め、1に錬金術、2に魔動機、3に魔法、4に実験だ。1、2、3は各2時間、4は1時間だ。間に20分の休憩も入れる。分かったな？』

『あの時間おかしくないですか？』

『おかしくないぞ。お前等は幸運だ。私はダンジョンで時間の流れを変えるアーティファクトを手に入れた。こいつを使い校舎全体の時間を倍にする。遅刻は厳禁だぞ』

『それって、かなりつかれるんじゃないですか？』

『うむ、だが安心しろ私の契約精霊の力で疲労を取り除くのでな。疲れずに授業ができる嬉しいだろう』

『地獄じゃ・・・何か言ったか？』・・・いえ・・・』

『受けたくない授業は受けなくていい。その間は工房か校舎内部で自習している。こんなところだな。各自施設を確認したら帰宅しろ。以上』

先生は出て行ったのでレナとニナをチームに誘うとするかな。

『ねね、ノア君僕達とチーム組まない？』

『先に言われたや』

『ってことはいいんだね』

『うん、よろしく。呼び捨てでいいよ』

『分かった！じゃあ、後三人までいけるけど・・・』

『あつあの、三人だけでもいいですか？』

『僕もできたら三人がいいかな』

『じゃ、三人で決定！施設見に行こ！』

『場所確認しなきゃね』

『はいです』

三人で施設確認に向かった。教室からは強烈な嫉妬の視線感じたけどね・・・クラス内で数少ない女子の中トップクラスの美少女二人、両手に花状態だし仕方ないな。

校舎の施設を見ながら会話していく。

『ところでノアは貴族だよ？』

『分かるんだ？』

『もちろん分かるよ。』

『すごいね〜』

『えっへん』

『すごく無いですよ。単に入学式の時、クラスの集合場所にいなかったから分かっただけです。貴族の方は上階で纏まりますから』

『だから、入ったときあんな見られたのか』

『二ナにネタバレされた〜』

『ところで、二人は神族？』

『うっ』

『あゝそれで差別とかしないから』

『えっと、父が人族で母が神族なんだよ』

『ハーフなんだね』

『はいです。父に引き取られたんですが去年亡くなりました』

『え』

『気にしなくていいよ。もう吹っ切れたからね。それから、入学決めてここに來たんだ。全寮制だしお金も稼げるから』

『そうなんだ』

『そうだ！ねね、もし無理だったら私達を愛人にして養ってよ♪』

『なっなにいつて、あつ愛人なんて・・・』

ニナの耳まで真っ赤にしてる可愛い♪

『いいよ、君達見たいな可愛い子なら大歓迎だよ♪』

『うっ、そう来るんだ』

『別に稼げてても養ってあげるよ？』

『かつ考えとくね？』

顔近づけるとレナも顔が真っ赤になった。

『実際問題、二人くらい平気だから何かあれば頼ってよ。友達なんだからね』

『ありがとう』

『ありがとうございます』

『じゃいこ』

『『うん』』

三人で校舎を回り別々に帰宅した。本来僕も同じ道だけど今日は帰宅しなきゃいけない。入学祝いをするから帰宅するよう頼まれたから。サクラ達と一緒に我が家へともどった。

第18話「入学式の夜」

自宅に付くと無理矢理ドレスに着替えさせられました。抵抗したのに！

『御祖父様・・・・・・・・』

『うむ、涙ぐんでどうしたね？』

『メイド達に無理矢理ドレスを着させられたんですが？』

『いったじやろ、入学祝いをするとな』

『だから、なんでドレスなんですか！』

『そっちのほうが可愛いじゃないか』

『完全に自分の趣味じゃないですか！』

『そうだが、どうしたのじゃ？』

くっ、こうなれば勝手に着替えて・・・・・・・・

『さて、時間じゃな』

『えっ、離して』

『だめじゃ、急がなくては先方を待たせるのでな』

『サクラ達がまだ・・・』

『先に向かわせたわ』

逃げられないか・・・・・・・・うう・・・・

『準備いいですね』

『孫達の為ならばな・・・』

『・・・・何処に行くのですか？』

『料亭じゃな』

『料亭ですか』

王家ご用達のところですか・・・・・・・・あそこなら料理美味しいから

我慢しますか……

『で、なんでこの方々までいるんですか？』

『親戚の入学を祝うのは当然じゃろ』

そう、目の前には王様に王妃様までいらっしやいます。

『そうだな』

『そうですね』

『……ありがとうございます』

『うむ、皆はあちらにいる』

『あっちに行く気は起きませんね。ワインのみたいですし』

あっちには、ルシアやサクラがヨミを見ている。ヨミの元にはすごい量の食器がすでに置かれてる。

『すいません、これとこれ、あとこれからここまでもお願いします』

『畏まりました』

気に入ったメニューの注文を済ませた。

『アルコールは大丈夫なですか？』

『？』

あれ？知って無いのかな？

『ああ、レイシエルはノアと飲んだことが無いのか』

『はい』

『こやつは強い』

あ、ワインがとどいた5本ほど。そのうちの一本をあけグラスにうつし香りお楽しんだあと味わいながら飲んでいく。そして、注ぐ・

・注文を繰り返す。

『どうじゃ？大丈夫じゃろ？』

『みたいです。顔色変わってませんね』

『そういえばフェルガよあやつらはどうしたのじゃ?』

御祖父様も身内だけならフェルガ王やレイシエル王妃の名を口にする。あやつってだれだろ?

『噂をすれば来ましたよ』

『父上母上、遅れて申し訳ありません』

『かまわぬ』

『ええ』

『怪我はいいのかの?』

『もう、大丈夫です』

『お久しぶりですね。アークレイさん』

『ノアさんの方もお変わり無いようですね。この度は入学おめでとうございます』

『ありがとうございます』

『私はあちらにも挨拶してきますね』

『分かった』

『いってらっしゃい』サクラ達の方へアークレイさんは向かっていった。

しばらく会話しながらワインを飲んでると遅れていた人がやってきた。

『お父様、お母様ただいま参りました』

『セレスティナかよくきた』

『たまにはお城にも顔をだしなさい』

『生徒会の仕事がありますので』

『そういえば今日校長先生蹴飛ばしてましたね』
こっちを向いて顔をしかめたや。なんだろ?

『こんな子供になんて量のワインのませてるんですか』

『子供って失礼ですよ!それにまだワイン17本しか飲んでませんよ』

『十分でしょ。んっ』

一本手に取って一気のみしてるや。

『ふう、いいワインですね』

『行儀が悪いですよ!』

『プライベートなので気にしないでください。改めて、私はセレスティナです。ごぞんじの通り、生徒会長をしています。なにかあれば言ってくださいね、大概のことは出来ますから』

『ありがとうございます』

『貴方がお兄様を助けてくださった方ですね。ありがとうございますました』

『お気になさらずに、お礼もいただいていますし……その剣……』

『これは、献上品の中にあつたのを気に入って使っています』

『ちよつと見せてもらってもいいかな?』

『どう……面倒だ口調を戻させてもらう』

剣を渡しながら入学式と同じ口調になった。

『こら!』

『こつちが楽なんだ』

親子のやり取りを聞きながら剣を調べる。やっぱりこの剣は……

『この剣の制作者をさがしているんだが知らないか?』

『これ作つたの私だよ』

『なっ! 本当なのか?』

『うん、柄を外したとこにサイン入れといたから見たらいいよ』

『……たしかに』

『ほう、しかし黄金を加工出来るなら技術学ぶ必要あるのかの』

『黄金だけ自由に扱えるのですよ』

『それってかなりすごいことだが……』

『今は、それぐらいしか出来ませんよ。剣の形状に黄金を錬成しただけです』

そう、加治屋みたいに造れるわけじゃない。『そういえば、宝物庫に魔法で武具を造る方法が書かれた魔導書があつたなレイシエル』

本当なら欲しいけど……宝物庫にある奴か、ダメだろうな」
『ありましたね。誰も使えませんでしたけど……』

『あの～』

『お父様、誰も使え無いならあげたらどう？ 欲しがってるけど』
『いいひとだ！』

『欲しいのか？』

『欲しい！』

『うむ、一応国宝なんだが……』

『入学祝いということはどうじゃ？』

『しかしな……』

『私の身の安全のためにもなるけど？ 使える装備ならばだけど』

『まあ、無くさなければいいか』

『ですね』

『やった～』

『あとで取りに来るといい』

『はい』

やった～♪

『では、いいのが出来たら頼む。あと、こいつのメンテナンスもな』

『うん、分かった』

『ああ、強くなるならな別の剣でもかまわぬがな』

『それは、もうちょっと学ばしてね』

『ああ』

それから、1時間後セレスティナがアークレイさんのところに行った
あと、爆弾発言があった。

『Fクラスでの寮じゃがな』

なんか嫌な予感がするんですけど～

『女子寮に住んでもらうことになったのじゃ。』

『え、なんですか？』

『フェリスに護衛を頼んだからの』

フェリス先生に？

『あやつと相談したら、女子寮なら護衛すると言うことになった。起きてる時は平気だろうから、夜と朝のみじゃがな』

『絶対？』

『絶対じゃ』

『なにかあったら・・・』

『別に平気じゃろ、Fクラスにいる者達なら調べておるしの。むしろ恋人か愛人でも作るんじゃない』

『ちよつとそれは・・・』

『なにフェリスにも手は回してあるし気にするな。それに、優秀な者・・・特に女性は、肉体関係にあったほうがのちに有利に運ぶんじゃない』

『そうなの？』

『うむ、惚れさせたりなど色々あるが、軽く依存されるぐらいがちょうどいいの、やり過ぎると危ないしの両方とも』

『へえ』

『ああ、ちなみに肉体関係を結ぶなら最後まで面倒みてやるんじゃないぞ』

『はい』

うーん、レナとニナに言ったことが本当になるかも？

レナSide

女子寮にある自室のベットに寝転びながら今日のことをニナと話している。

『ニナ、明日どうする?』

『明日から授業開始だよレナ』

『分かってるよ』

勉強ついてくればいいけど……

『それにしてもレナ、ノア君にあんなことってどういうつもり?』
顔を赤らめながら問い詰めてくる。

『両親のこと?』

もちろんとぼける。

『違うよ、その、あの……(ごによごによ)』

『ちゃんといわないと分からないよニナ?』

『あ、愛人の……こと』

『なんて?』

『愛人のことです!』

耳まで真っ赤だ♪

『怒らないでよ、冗談半分でいったのに』

『冗談半分でよかつ……半分本気なの!』

『まあまあ、冗談のつもりだったんだけどあんな切り返ししてくるなんて思わなかったの』

思い出したらこっちまで顔が熱くなってきた。

『反省してね?』

『うん、でも気をつけなきゃね』

『?』

『この国の貴族は愛人とか作る人多いんだって、無理矢理な人もいるって聞いたことある』

『そんな……』

『だから、気をつけてね? ニナはどこか抜けてるんだから』

『レナに言われたくないけど、ノア君は大丈夫かな?』

『分からないよ。でも、これからほぼ毎日一緒にいるんだから早めに調べてみよ』

『うん、いい人だとは思うけど……』

『演技の場合もあるしね』

『うん、気をつけるよ』

『ま、ノア君の愛人になったほうが楽かも知れないけどね』

『レナ!』

『あはは』

本当分らないけど、私の勘はノア君と一緒にいると楽しめるって告げてるんだよね。明日から楽しみ。でも、なにがあってもニナだけは守り通す。ニナも同じ気持ちなんだろうけどね。

さて、明日にそなえて寝よう。

『お休みニナ』

『お休みレナ』

レナ
Side
End

第18話「入学式の夜」(後書き)

ご指摘いただいたタグ消しました。多分これで直ってると思います。

第19話「授業開始」

次の日、教室に行き席についてもらっ、借りた魔導書を読んで解析していると16歳くらいの男が声をかけてきた。

『なあ、俺達と組まないか？』

男の後ろには二人の厳つい男がいたが答えは決まっている。

『断る』

『そういうなよ、おい』

『そうだぞ痛いめあいたくなかったらな』

もちろん無視して作業を進める。誰も使えなかったのは制御が難しすぎたからみたい。一つの意志の元に数十人分の魔力を扱わなきゃ起動すらしない。普通に考えて意識が別れるし片手間に精密作業までしなきゃいけないから。解決方法は………紙に書き手は紙を捨てていく。（この時代では、かなり高価な品にあたる）

『おい！無視するな！』

『うるさい』

『なっ！』

『静かにしている』

『この野郎！やっちまえ！』

『おう！』

殴りかかって来るが無視して作業にもどる。どうせ無駄だし。

『くらいやがれ！』

『なっ！』

一応見ると、殴ろうとした手が空中で見えない壁によって弾かれていた。

『魔法障壁か！』

『正解。対物対魔共に強力だね』

『くそ、こいつで!』

『いいの? 攻撃魔法なんて使ってさ』

『ふん、ばれなきやいいんだよ!』

『残念、遅かったね』

『なに・・・ぐはあ!』

『私の校舎でいいときようだな』

吹っ飛んで壁に激突した。

ええ、僕は先生が見えたから放置しました。

残りの二人に体罰、もとい教育的指導を行った。

『今の実力を計るためテスト用紙を用意した各自、やっておけ。私
はこいつらを連れていく』

教卓の上にテストをおいて出ていった。

教卓の上を調べると各分野ごとに置かれていた。

『おはよう』

『おはようです』

二人が投稿してきた。

『おはよう、今日は実力テストだって』

『ええ〜テスト? やだな〜』

『レナ、ちゃんとやらないといけないと・・・』

『だね、教卓にあるからとっておいで』

『仕方ない、とってくるね』

『ありがとうございます』

作業に戻る。

『ん〜これがこうなって』

『こんなに散らかしてなにしてるんですか?』

『んとね、ある魔法を使うために、自動制御する補助術式を考えてるんだけどねーうまくいかないの、これなんだけど……』

『見せてもらいます？』

なにかわかるかな？

『うーん、ここをすこし減らして、こつちを足せば……』

『でも、それだどこっちがね』

『ただいま！何してるの？』

『制御術式考えてるの』

『あー専攻違うや私魔動機だから』

『解決策にはなるかも知れないし見るだけ見たらいいですよ？』

『じゃあ、ちょっとだけ……あれ、これはこうして……』

『なにかわかった？』

『どうです？』

『魔動機技術だけいい？』

『うん』

『えっと装置として……』

『なるほど、それならいけそうだけど術式がかなり刻めるかどうか……』

『あの、それなら私ができるです』

『うそ！本当に？かなり難しいよ？』

『ふっふふ、ニナは付与術士としてはかなり優秀なの！』

『へえ』

すごいなー、付与自体かなり大変なんだけどね。まず、術士の適性があるのがまずいない。

『ゆっ、優秀じゃないです！魔力ないし……うう』

『魔力？』

『ニナは魔力量が低いから、あんまり強い付与ができないの。他は天才クラスなのに』

『それを言うならレナだって魔動機技術凄いじゃないですか』

『うつ、苦手なものがあるよ』

『あはは、レナはなにが苦手?』

『・・・プログラム・・・たまに・・・暴走したり・・・』

『たまに?七割暴走してるですよ?お陰で修繕費やら色々・・・』

』

『ごめんなさい』

『くすくす』

『笑うな』

『あなたも、笑いごとじゃないですよ?』

『いや、僕プログラム得意だし』

前の世界でやることなくてフリーソフトやセキュリティ作ったりしていたからね。Aiにこりだしたけどスペックがねくん?もしかして。

『本当!?』

『う、うん。あ、これくらいのスペックだすのにどれくらいの大きさいる?』

『それくらいなら、今だとこれくらいかな』

『うそ!本当?』

『うん、素材があればもっと小さくなるよ?』

提示された大きさは拳大の大きさ。それも、少女の小さな手だよ?粒子コンピュータですか?もっとすごそう。

『お金はいくらでもだすから作って!』

『うん、かなりかかるけど・・・・・・これくらい・・・(ごにょごによ)』

『それなら、いけるよこれくらい(ごにょごによ)』

『え、そんなに?』

『うん、三個作って他にも色々いるかな』

『わかった。任せて』

『どうしたのです?』

『ニナにも手伝ってもらうね。後で工房に集まろう。もうすぐ時間

だからね』

『はいです』

『りょーかい』

少しして実力テストが開始された。終わったあとプログラムを考えたり、ちなみにプログラム技術は元の世界の方が高い。こっちはあくまで遺物の解析して得た技術だからね。

テストと午後に行われた戦闘関連のテストが終わったあと、先生の契約精霊によって疲労すら取り除かれた。でたらめな力だな、お陰で濃密な訓練できるけどね。

『さて、各自チームを組んだ奴はこの用紙に記入しろ。二週間以内ならチームの組み替えも認める。書いた奴は待機している』

用紙が配られてきた。名前と希望する工房が選べるようになってい

る。

『工房の希望も書いておけ、見に行つて無い奴はしらん』

『どうする?』

『どうしよっか』

『んゝ何個か候補はありますけど・・・』

『どれも、人気ありそうだな』

『だねえ』

周りにを伺うとやっぱり施設がいい奴は人気ある。

『そうだ、ノアじいさんから渡すように頼また奴だ。うけとれ』
先生が袋を投げて来る。

『ありがとうございます』

なんだろう？中を覗くと金貨数十枚と手紙が入っていた。まず、手紙から読もう。

『ふむふむ』

『なんだったの？』

『ああ、アドバイスとお手伝いの報酬だっけ』

そう、王様の業務を少し手伝ったやつ。元の世界で使われている保証制度や税に関してなどお教えしました。

『凄いね、金貨50枚あるよ』

『ねね、アドバイスによると広くて地下あるところがいらしいよ。だからここどうかな？』

『でも、ここは……』

『あ、あそこです？』

嫌そうだな。まあ、わかるけど。

『やだやだ、虫とか黒いのいそうだし！』

『それに、ボロボロで危なそうです』

『うん、だから人気がないんだけどね。でも、改修や掃除すればいいんだよ。幸いお金はこれ使えばいいしね』

『でも、このお金は……』

『後で設備投資するんだし気にしないでいい』

『でも……』

『大丈夫だよニナ、売上をだせばいいんだよ』

『できなかったら……』

『なら、頼む付与の代金ってことでいいよ』

『はいです』

しばらくして仮組のチームができたので、工房の希望が黒板に書かれていく。

『さて、重なっているところは抽選だが・・・お前達正気か？あそこは・・・』

『好きに改修していいですよね？』

『構わないが三日以内に最低限使えるようにしろよ』

『了解、学園に人入れる許可はくださいね』

『それは問題ない』

『わかりました』

他のチームも抽選で工房を決めていった。

HRも終わりこの後の事を相談する。

『さて、まず改修については任せて。レナは今朝言ってたのを早急に一個お願い。それを使って色々するからね。プログラムできたらニナに術式を刻んでもらうからね』

『了解』

『はいです』

『じゃあ、今日はここまでね。また、明日』

『またね』

『また』

さて、下見に行きますかね。

相変わらずごちゃごちゃして、ボロボロだな。今日やることは構造の把握。事前に設計図は手に入れておいた。探索の魔法も使い違うところなど調べると増設されたのが色々見つかる。中に入り神力を放出すると虫など生物は逃げ出していく。支配圏を作り調査を行
いわたった事を紙に記していく。

『さてこんなものか、次は家に戻るか』
空を飛び自宅の方へ向かっていく。

『ただいま』

『お帰りなさいませ』

『御祖父様いますか？』

『旦那様は書斎の方にいらっしゃいます』

『ありがとう』

書斎のドアをノックするとすぐ返事がある。

『入りなさい』

『失礼します。ただいま御祖父様』

『お帰り、どうした？』

『早急に人手が欲しいのですができますか？』

事情を説明する。

『なら、危険だから普通の連中は使えんな。騎士団の暇な連中を動かすかな。連中なら大丈夫だろう』

『騎士団なんか使って平気なんですか？』

『金と権力は使ってなんぼじゃ』

『まあ、任せます』

『ああ、今日將軍と飲むからな。ちょうどいいわい。こないか？』
『ん』

『美味しいワインがあるぞ』

『行きましよう』

『うむ』

次の日の早朝騎士団の隊長さんを連れて工房前に連れていく。

『ここか？』

『はい、中の物を運び出してください』

『わかった。労働の割に報酬もいいしすぐ終わるだろう』

『期限は今日の夕方までです』

『はやいな・・・わかったすぐに取り掛かる』

『お願いします』

『では、僕は授業受けてきます』

『おう、がんばてな』

隊長と別れて校舎に向かっていく。AIはほぼできてるしレナしだいか楽しみだ。

第20話「現在工房中……」

レナSide

朝、ニナと共に教室に行き、昨日徹夜で作った複合型魔力結晶インテリジェントデバイスの最終チェックを行う。

部屋でやりたかったけど時間ないから仕方ないじゃん。

もちろん機材も持ち込んでいる小さいのだけどね。

『ふあ〜』

『大丈夫です？レナ』

『やっぱり眠いよ。お腹も減ったし……』

朝ごはんを食べる時間がなかったのは痛いな

『そう言うと思って作ってきたよ』

『おお、ニナ、愛してる』

『なにいつてるですか。どうぞ、サンドイッチです』

『うん、でも今手が離せないから食べさせて』

『えっ』

『あゝん』

『はいです』

最初は嫌がるけど結局言うこと聞いてくれるニナが好きです。

『ニナ、結晶体はこれでいいかな？』

『うん、大丈夫です』

『よし、後はノアが持ってくるプログラムに書き換えればいいかな』

『術式を刻み混んであるし多分大丈夫だと思うけど動かさないと分からないです』

『だね』

『なあ、俺達と組まないか？』

所々に包帯を巻いた三人の男だった。

『っ』

ニナが私の後ろに隠れる。怖がりなんだからしかたないな。

『嫌、ニナが怖がってるしね』

『そこをなんとか、それに君だけでもいいしさ』

いやらしい目で私達を見つめてくる。下心満載の人なんてお断りよ。

『嫌だよ、もうチームも組んでるし』

『でも、君達の工房はあんなボロボロでゴミだらけじゃないか』

『うっ、でも修繕するから平気よ』

『です』

『いいから、俺達と組めよ!』

『痛っ、何するのよ離して!』

『俺達と組めば離してやるよ』

『嫌って言っててんでしょ! ニナ逃げて!』

『うっ、うん。先生読んでくるです』

『おい逃がすなよ』

『おう』

『きゃっ』

『ニナ！』

レナSideEnd

朝早いから人もあまりいないなく待ち合わせもあるし早くいくか。

『うわっ』

教室のドア開けようとしたらニナがぶつかってきた。

『きゃっ』

『どうしたの？』

『れ、れなが』
なんだ？

『まてこら！』

『なるほど』

ニナと位置を入れ替えて前にでる。迫って来る奴には急所に蹴りをプレゼント・・・あとで靴洗わなきゃな。どこを蹴ったかはご想像にお任せだ。男が倒れ悶え苦しんでる上を歩き教室の中に入る。

『さて、懲りずにこんなことして学習しないね』

『てめえ』

『レナ、大丈夫？』

『うん』

『ならよかった。とっとと汚い手をレナから退けろ』

『へっこいつはもらっ、ぎゃあああああ』

『喚くなただ汚い腕が落ちただけだろ』

男の腕から血は出ていない。

『お、おれの腕があ！』

『汚い手を退けないからだ』

いいつつレナを抱き寄せて無事か確認する。

『うん、平気みたいだね』

『うっ、うん。あれは大丈夫なのかな？』

『平気だろ傷口を焼き切ったし汚い血が飛び散ることもないしな』
『そういう問題じゃ・・・まあ、いいかな・・・うう』

どうしたんだ？ 様子が違うけど。

『顔赤くして大丈夫か？』

『だっ、大丈夫だから！ ニナは平気？』

『うん』

『さて、あんたはどうする？』

最後の一人に剣を向けながら聞く。ダーインスレイブの呪いはさつき切り落とした時に吸わせた。呪いを弱めてこれだしなく魔力も吸われるし疲れる。

『わっ、わるかった。許してくれ！』

『なら、そいつらをさっさと連れていけ』

『ああ』

いったか。

『二人共無事で良かったよ』

『うん（こく）』

『ふう、ニナが無事でよかった』

『レナこそ無事でよかったです』

『んゝこれから一緒に登校しようか』

『それがいいね』

『迷惑じゃなければお願いするです』

『わかった。それに近いだろうし』

『『?/?/?』』

『何でもないよ。それで、頼んでた物できてる?』

『うん、ニナに術式も刻んで貰ったよ』

『はい、補助部分だけですがおきましたです』

『わかった、プログラムを入れてテストしようか』

『オッケー』

『ニナはこの術式覚えておいてね』

昨日渡した奴の改良した術式を渡す。

『はいです』

『お願い。レナ、これにプログラム入ってる』

『わかった』

調べてみたら、OSも古かったから改良したほうがいいか。

15分後、プログラム・・・・・・・・AIの移し替えが終わった。

『できた』

『だねー時間も危なかったからよかったよ』

もうすぐ授業が始まる。

『あれ？動かないよ？』

『えっ、貸してみて』

『どう？』

『これ、OSがしょぼいからかな』

『あう、ごめん……』

『気にしないでいいよ。OSも弄るしね』

『おうできるんだ〜凄いね〜』

『こっちてきに、こんなハイスpekなの作れる方が……いや』

『じゃあ、お願いね』

『うん』

『お前ら、席に付け！授業始めるぞ！』

『じゃ、また後でね』

『はい（です）』

昼休みに先生に呼びだされた以外は得に問題無かった。呼び出されたのは今朝の事だけどうにかかりましたよ。権力などで、先生からは過剰防衛は控えるよう言われたけどね。事情言えば、問題無いと言われました。教師としてどうなんだ？

『よし、OSの更新終了っ』

『お疲れ様です』

『どうにか、放課後に間に合ったね』

『だね』

『じゃあ、今から術式刻もうか』

『はい、です』

術式を水晶に入れると水晶を変えないと普通は一つの魔法しか使えないけど………

『A Iに魔法を覚えさせるなんて無茶苦茶だよね』

『記憶して、解析する魔法を刻めば記憶容量は機械で補えるからね。魔力も何か考えるかな』

『お願いします』

『わかった、じゃ始めるか』

『はいです』

ニナの手を握り、魔力を与え儀式を始めた。

一時間後、無事儀式が終了した。

『あう』

『大丈夫？』

ニナの身体から力が抜けて、倒れそうになったので抱き寄せた。

『はっ、はいです』

『疲れたんだね。魔力を貰いながらの作業だからいつもより疲れたのかな』

『少し休憩すれば……大丈夫……です』

うーん、見た感じ平気かな。

『そういえば、工房はどうなってる？』

『今朝、中の物を取り出す作業を頼んだから終わってるかも』

『後、一日で大丈夫？』

『平気だよ、設計図もできてるしね』

『これ使えば楽だね』

『うん』

『もう大丈夫です』

『なら、行ってみるか』

『おゝ』

『・・・（こく）』

工房前にガラクタが積まれていた。

『やあ』

『隊長さん終わりました？』

『ああ、なんとかな。色々危なかったが、言われた通り魔力あるのはこっちにわけといたぞ』

『ありがとうございます。報酬はあっちに任せといたからあっちから受け取ってください』

『わかった。また何かあれば呼びな』

『ええ、お願いします』

報酬は御祖父様に渡しといたしね。隊長さん達が分けてくれた奴を調べる。

『騎士団動かしてたんだ……』

『うん、つてを使ってね』

『結構な権力者さん？』

『権力なんて持ってないよ？』

私の力じゃないしね

『そうなんだ。どうするの？』

『こうする』

デバイスを起動させ、固体名を決める。

『固体名“クレアション”』

『“固体名クレアションを登録。システムチェック開始……
ALL GREEN”』

『創造開始』

『了解、創造開始。魔力を供給してください』

魔力を流し込み続けながら、分けてもらったゴミを分解し資材に変える。

『すごい魔力だね．．．．．でたらめな．．．．』

『うん、あのうちの少しでも欲しいです』

『だね』

なんか言ってるけど置いといて、資材が全然足りんな。仕方ない裏技使うか。

『ちょっと中に行ってくるね』

『わかったここで待ってるね』

『行ってきます』

『いってらっしゃいです』

中に入りフレイヤの力を使い大量の黄金を生み出し材料に変えていく。

さすが黄金、効率がいいね。これなら、かなりの防御能力や魔力効率のいい施設になるな。

よし、黄金の不死性など利用して工房全体に再生能力付けるかな。レナが暴走起こしたりするらしいしね。問題は増設が面倒だがいいや。

『“エネルギー、資材共に準備完了。実行しますか？”』

『再生術式を混ぜて実行して』

『“了解、実行します”』

工房全体に魔法陣が展開され光りに包まれる。クレアションを中心に取り付け、レナとニナの二人に合流するため外に出る。

『ただいま』

『『おかえり（です）』』

『もう平気なの？』

『うん、中に取り付けてきた。明日までかかりそうだし』

『そっか、じゃあ解散？』

『だね、女子寮まで一緒に行こうか』

『はいです』

昨日は、家で寝たからね。はあ、女子寮か……。Fク
ラスだけだから楽だろうけどね。

第20話「現在工房中……」(後書き)

『全然でないね』

『……………(こくこく)』

『一応番外編で考えてるみたいですが……………』

『楽しみ……………』

『それまでも出れる見たいですね』

『よかった』

『……………うそ……………だった……………たべる……………』

頑張って見ます。

女子寮へ行こう！

しばらくして、女子寮についた。

「ここでお別れかな。」

「だね。」

「いや……………」

「やっときたか。ノア」

声をかけてきたのはフェリス先生。はあゝ。

「F組み女子寮にようこそ。」

「えっ、どういふことですか？」

「まさか、ノア君もここに住むの？」

ここに住めっといわれてるんだよな。

「でも、女子寮ですよ？」

「こいつの護衛のためだ。それに、そいつ男でもあり女でもあるぞ。」

「「えっ！」」

「この肉体が元女で精神が男なんだ。」

そして、詳しく説明した。まあ、事故で身体が女性になったてことぐらいだけどな。

「そうなんだね。」

「苦労してるんですね。」

そうなんだよね。まあ、楽しいけど。

「ま、これからよろしくね。」

身体を女性に変える。髪の毛を纏めていた紐を外しストレートにする。

「綺麗……………」

「可愛い……………」

「たしかにな。」

「男なんだけど？」

まあ、半分諦めてるけどな、こっちの姿を利用したりするし。

「まあ、部屋は最上階の一番奥だ。隣にレナ達がいるからきくとい
い。」

「分かった。」

「じゃいこっか！」

「うん。」

「ああ。」

女子寮の中に入り、施設の案内を受けた。

部屋に行き荷物を整理する。

「手伝うね。」

二人の申し出はありがたいな。

「ああ、頼む。そこの奴を頼む。」

「はい。」

しばらく片付けをしていた。

「うわ、すごい。これ粒子理論に相対性理論だ。」

「こっちは高位魔術書や……………禁呪書まであります……………」

ああ、今まで集めた本だな。

「まだいろいろあるし、仕舞い終われば読んだらいいよ。」

「「本当!」」

ハモった。

「ああ、ただし持ち出し禁止な。」

「分かった。」

「うん。」

その後、1時間たち片付けが終わった。

普通より広いんだけど本で埋まったな。

「いっぱいあるね。」

「だね。」

教室くらいある部屋の半分が本棚で埋まりキングサイズのベットに
タンス、ふかふかの絨毯などで埋まってる。冷蔵庫もあるし、簡易
キッチンまである。日本と同じで靴を脱ぐ仕様にしました。

「便利だね……………」

「入り浸りそう。」

「合い鍵渡しとくね。」

「「いいの!」」

「うん。」

すごい反応だ。

「ああ、ほらどうぞ。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

いい時間になってきたな。

「ご飯どうする？」

「食堂行きます？」

「そうだね、いくか。」

この選択を後に後悔することとなるのだった。

なんだこれ……………。

食堂にはFクラスの女子が……………10人（全員）いた。これはいい、格好がすごいんだ。ネグリジェなどや一部下着姿の奴までいる。

「……………」

「昨日からこんな感じだね。」

「うん、女の子しかいないからね。」

「帰る。」

こんなところられるか！知り合いならともかく。

「その子だれ？」

「おゝ可愛いねゝ」

「「ノア君だよ」」

おい！ばらすなよ。

「「「ええゝ！！！」」」」

うるさい。

悲鳴が上がったり、部屋に急いで戻った人がいた。そのままの人もいる。

「なんでここにいるのよ！」

「それはね……………」

かくかくじかじか説明終了。

「文句は先生にいつてね。」

「「う……………」」

まあ、無理だろうけどね。

その後、ご飯を食べ部屋で紅茶を飲みながらくつろいでいるとレナとニナが早速やって来た。

「おじゃまします」

「お邪魔するです。」

「いらっしやい。さっそく来たんだね。」

「「うん。」」

「ゆっくりしたら………する気だね。」

彼女達が後ろ手に隠していたクッションを見つけた。

「あははは。」

「ごめんなさいです。ダメです?」

「いや、いいよ。そこに紅茶があるから好きに飲んだらいいよ。」

「はい、お姉ちゃんにがいいです?」

「んと、アップルティーでお願い。」

「僕も。」

「はいです♪」

ちゃんと蒸したり本格的にやってくれてる。

「茶葉もつてきていいです？」

「ああ、好きにしたらいいよ。無くなっても怒らないなら。」

「はいです。なら、明日いろいろ持ってきます。」

「いいね」

レナがクッションを枕にしながら工学系の本を読んでいる。

「すごく寛いでるね。」

「だ、だめかな？」

「いいよ。」

「もう、お姉ちゃん行儀悪いです。ごめんなさいです。」

「気にしないでいいよ。」

「はいです……………／／／」

顔を赤らめ恥ずかしそうにしてる。

「ふう、こんな感じかな？」

「なにしてるの？」

「設計図書いてみた。」

「これは銃？」

そう、ライフル。

「うん、アンチマテリアルライフルっていう狙撃銃だよ。」

「す、すごいスペックだね。成る程ここをこうすればいいのか……
……………」

昔、プログラムならった人にいろいろ見せてもらったの覚えていたからそれを改良したんだけどね。

「どう？.できる？」

「頑張ればいけるかな。」

「なら、作ったらレナが使えばいいよ。」

「いいの！」

銃弾は二ナに頼むけどね。

「じゃ、早めに作ろうか実戦訓練始まるまでにね。それまでこれで練習すればいいよ。」

買ってあった銃をレナに渡す。

「ありがとう。」

「二ナはデバイスを使うんだよね？」

「はい、そのつもりです。」

「なら、そっちもすぐ入るかな。」

「よろしくです。」

さて、楽しくなってきた。

女子寮へ行こう！(後書き)

ネギま優先するのでゆっくり更新します。

カンピオーネも書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5234q/>

悠久のラスタリア

2011年4月9日21時05分発行